

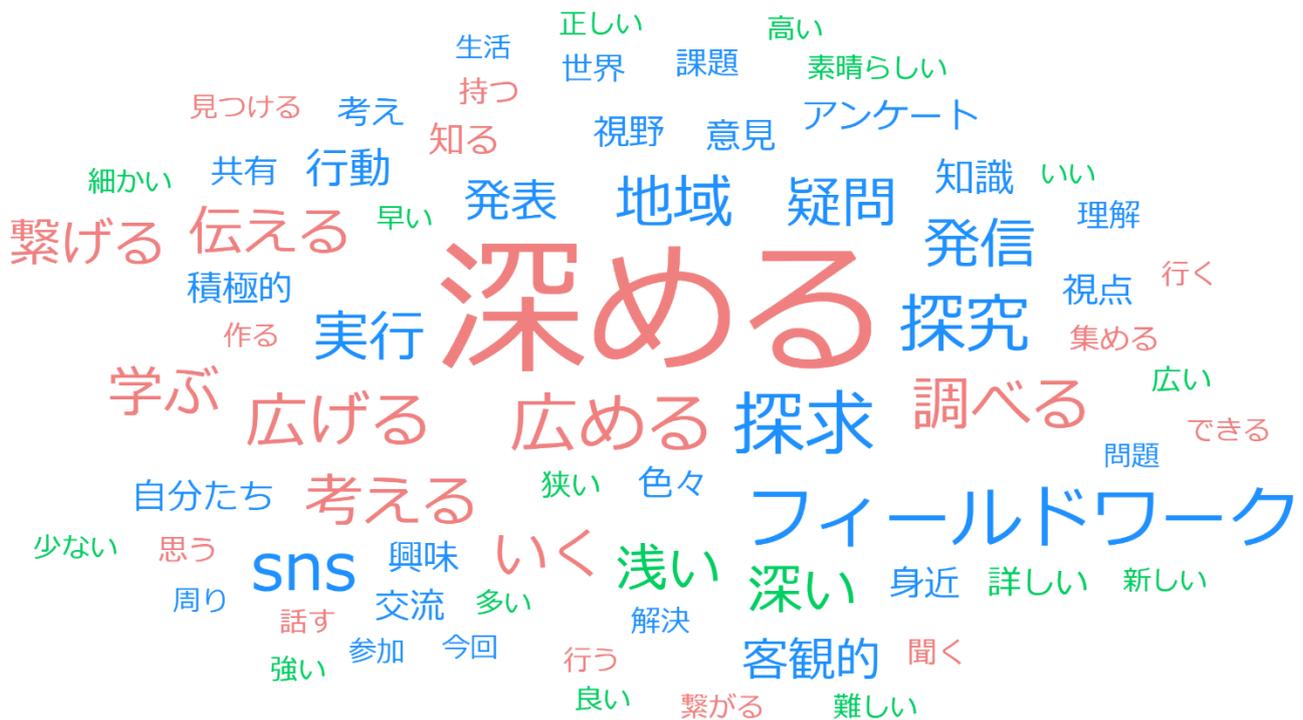


兵庫県立柏原高等学校

2024 年度（令和 6 年度）活動報告集

翔びたて柏高！

～地域での学びを自分の未来へとつなぐ～



丹波から TAMBA へ・自己理解と他者理解の螺旋

地域課題を活用した、「多様な価値観を共有する人材」を育成する教育課程の開発

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

目 次

【巻頭言】	2
兵庫県立柏原高等学校長 稲次 一彦	
運営指導委員会委員長 高畑 由起夫(関西学院大学名誉教授)	
1 実施状況	4
(1) 実施計画	4
コーディネーターの役割図	22
(2) 事業結果説明	23
(3) 研究推進部活動内容	30
(4) 地域科学探究科（新学科）の3年間の探究プログラム	32
(5) 運営指導委員会	34
(6) 視察訪問	41
2 各学年の取り組み	42
(1) 1学年（丹 BAL I & 総合的な探究の時間 I）	42
(2) 2学年（探究 II）	46
(3) 2学年（丹 BAL II）	50
(4) 3学年（総合的な探究の時間 III）	53
(5) 3学年（グローバル）	54
3 第9回「地域課題から世界を考える日」	56
4 第2回「知の探究発表会」	58
5 発表成果例	60
(1) 生徒探究テーマ一覧	60
(2) 1学年（丹 BAL I & 総合的な探究の時間 I）	77
(3) 2学年（探究 II）	78
(4) 2学年（丹 BAL II）	79
(5) 3学年（グローバル）	80
(6) 新聞記事	85

本校の資料館には、1930年（昭和5年）頃、本校の前身である柏原高等女学校の生徒が書いたと思われる研究論文が保管されています。「月の研究」「童謡の研究」「俳句の歴史」「現在の交通機関」「石油ランプ」等々、様々なタイトルで個人研究されており、それぞれ手書きで一万字ほどの論文にまとめられています。今から約100年前に、本校ではすでに「探究的な学び」が行われていました。その後、平成20年に「知の探究コース」が設置されるまで、「探究」という言葉が表に出ることはなかったのですが、「探究的な学び」は本校のDNAに確実に組み込まれており、コースの生徒達は、主体的に探究活動を進め、知識を深めてきました。令和元年には、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、コロナ禍で様々な制限はありましたが、探究的な学びを学校全体で進めてきました。そして、令和4年度には、文部科学省の「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、これからの時代の新しい学びのためのカリキュラム開発を進めてきました。その成果として、令和6年度からは、本県初の普通科新学科である「地域科学探究科」をスタートさせ、探究活動を中心に学びの深化を図る取組を全校展開しています。

これまで本校では、1年生の「探究Ⅰ、丹BALⅠ」で、探究活動の基礎・基本を学び、グループ研究で基礎実践をし、2年生の「探究Ⅱ」や、「丹BALⅡ」で、自分が最も関心がある地域社会の課題等について自らテーマを設定し、個人研究を進め、いろいろな発表会で丹波の課題や魅力を発信してきました。そして、3年生の「グローバル」では、課題研究の深化を目的として、調査分析、論文作成等に取り組んできました。

新学科では、これらに加え、「教科横断型探究」や「自己探究」等で論理的思考力や自己表現スキルを磨き、大学や地域で開催される事業にも、積極的に参加し、探究の成果を発表する等、生徒の活躍の場を増やしていきたいと考えています。

本冊子は、事業の最終報告書となります。この3年間、本校教職員は多くの時間を費やし、議論や試行錯誤を繰り返してきました。これは生徒だけでなく、教職員にとっても、これまでの自分達の教育を一から考え直す貴重な体験だったと考えています。今後も、これまで本校が培ってきた取組を、探究的な学びの「柏原モデル」として発展させていくとともに、新学科の魅力・特色づくりに教職員全員で取り組んでいきます。

最後になりましたが、本校の探究活動の発展、本事業の推進および新学科のスタートにあたり、ご支援、ご協力をいただきました文部科学省、兵庫県教育委員会、丹波市、関係大学、地域の皆様、同窓会の皆様に厚くお礼を申し上げます。今後とも、柏原高校の発展に引き続きお力添えをいただきますよう、どうぞよろしくお願いたします。

新学科の発足をお祝いするとともに、地域に根差した新しい高校像に期待します

高畑由起夫（関西学院大学名誉教授）

柏原高等学校では、「SGH アソシエイト校」や「地域との協働による教育改革推進事業（グローバル型）」等での実践をふまえて、「新時代に対応した高等学校改革推進事業」に取り組んでこられました。この間、コロナ禍等にも見舞われましたが、令和6年4月には新学科として地域科学探究科をスタートされました。運営指導委員としてその活動を拝見してまいりましたが、事業が順調に進展したのは何よりも教職員、ならびにコーディネーターの皆様の創意工夫と努力、さらにそれらの活動を支援された地域の方々のご協力の賜物と存じます。とくに地域と高校を結びつけるコーディネーター制度は、たんに柏原高校だけの改革にとどまらず、兵庫県の中山間地帯における高等学校のあり方に関するモデル作りにも参考になるのではないかと考えます。同時に、兵庫県や丹波市等に対しては、高等学校を地域行政の中に積極的に位置づけ、地方創成の一環として連携を強化すべき施策として推奨したいと思います。

一方で、こうした改革事業はむしろこれからが本番と言うべきであり、対応すべき課題もまた多く残されているようです。改革のさらなる発展を期待して、以下に、感じた課題をいくつか挙げたいと存じます。

まず、高校内部での課題については、探究学習でのリサーチやプレゼン・スキル向上のさらに次の段階として、他者の発表を理解しながら質疑を交わし、互いの議論を深めるディスカッション・スキルの向上があげられます。同時に、デジタル化社会の急速な発展にあわせて、情報リテラシーやデータ・サイエンス能力の向上等も必要です。可能であれば、従来型の図書室ではなく、図書+デジタル+ディスカッションの場を融合させたラーニング・コモンズのスペースの充実等が推奨されます。

また、今後、探究学習の成果やスキルを、上級生から下級生へ継承していくことができるように、カリキュラムを工夫することも重要かもしれません。他の高等学校の中には、積極的に学年間の継承を図っている事例もあり、是非、このあたりの工夫をお願いしたいと思います。さらに地域科学探究科での実践の進展にあわせて、そこで得られた成果を他の普通科クラスの授業に反映させていくことで、高校全体のレベルアップを図ることも欠かせません。

ここまでは高等学校内部の課題ですが、次に、学校外との連携がますます重要になってくるものと予想されます。とくにコーディネーターの皆様を通じて丹波市や周辺自治体・地域の住民の皆様との連携がさらに深まることを期待いたします。とくに柏原高校は120年を超える歴史によって、地域社会に広い人脈を有するとともに、周辺地域には豊かな地域財産や伝統文化が存在します。こうした地域特性を教育資源として取り込んでいくと同時に、高等学校から周辺地域への発信＝アウトプットしていく仕組みづくりが重要になってきます。さらに兵庫県全体でコーディネーター制度の普及・恒久化を進めることで、地方創成での一つの核として機能することが期待できます。

また、カリキュラムや探究活動等の進展にともない、先生方には最新の知識・スキルの修得・更新が必要になるかもしれません。そのためには、外部講師等による先生方への研修等も考慮すべきと考えます。この点、とくに兵庫県内の高等教育機関（兵庫教育大学や兵庫県立大学等）とのネットワークによる連携等も必要になってくると思います。もちろん、こうしたネットワーク・システムは柏原高校にとどまらず、県教育委員会等の主導によって、兵庫県全体で進めていくのが望ましいと考えます。

最後にあらためて、これまでの教育改革推進事業でのご努力と成果を高く評価するとともに、地域科学探究科のスクール・ミッションである、「進取創造 質実剛健 敬愛和協」の理念のもと、主体的に物事にチャレンジし、多様な価値観を理解し協働する力を備え、人類や地域社会に貢献できる人材の育成の実現に期待いたします。

1 実施状況

(1)実施計画

〔事業の概要〕

○ 学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	兵庫県立柏原高等学校 (ひょうごけんりつかい ばらこうとうがっこう)	地域社会学 科	令和6年度	○

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科の別を記載すること。

※設置（予定）年度は令和4年度、令和5年度又は令和6年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

○ 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称(決定している場合)
全日制	40×3学年=120人	学年制	地域科学探究科

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

○ 学校の特徴

創立126年の伝統があり、4万を超える卒業生は日本各地をはじめ世界で活躍するとともに、多くの卒業生が地元の教育、医療福祉、地元産業を中心的に支えている。本校の使命として、少子高齢化、過疎化が進む地域を支える人材を育成するとともに、地域課題の解決に向けて主体的にチャレンジする生徒の育成することが求められている。

○ 研究開発の概要

地域のポテンシャルを生かし、地域資源を活用した「地域を知る学び」を通じて、学ぶ楽しさを実感できる機会を提供する。これにより、生徒が自身の興味・関心のある分野について探究を深め、多様な価値観を理解した上で、学びの成果を外部へ発信していくことを目指す。

この取り組みを持続可能なものとするため、学校職員とコーディネーターが連携し、協働体制を構築するとともに、校内の支援体制を整備する。

また、教科横断的な年間プログラムを構築し、知識のネットワークを形成することで、生徒の主体的な学びを促進する。さらに、生徒が多様な価値観を理解し、共生社会において主体的に行動できる人材へと成長することを目的に、「自己理解」と「他者理解」をテーマとした学びのカリキュラムの在り方について研究を進める。

○ 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

現在の取組みと改編後の科目名称

	知の探究コース→地域科学探究科	普通科一般クラス
1年	探究Ⅰ（１）→丹 BALⅠ（１）	総合的な探究の時間Ⅰ（１）
2年	探究Ⅱ（２）→丹 BALⅡ（２）	丹 BALⅡ（１）
3年	丹 BALⅢ（２）	総合的な探究の時間Ⅲ（１）
	グローバル（選択２）	

（ ）は単位数

「総合的な探究の時間」を本校独自のものとするため、①地域から学び地域で活動することを「丹波る」と動詞化、②グローバル(GLOBAL+LOCAL)を言い換えて「ローカル」＝「丹波」から「丹 BAL」、③「丹波で Be A Leader」、④「丹波で Best Achievement Learning」という願いを込めて「丹 BAL」と呼ぶ。

【探究の基礎・基本】 1年次「丹 BALⅠ」

探究の基礎である「問い」、「情報収集・情報処理」、「分析・考察」、「まとめ・発表」を、それぞれ、グループでの簡単な探究的活動を繰り返す中で、実践的に探究の基礎を身につける。

また、ある程度制限されたテーマの中で探究の手法を学ぶために、SDGsから問題を焦点化し、丹波地域の「丹波市ゼロカーボンシティ宣言」を題材に、丹波市役所の協力のもと、基礎実践探究を展開する。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

【探究活動の応用実践】 2年次「丹 BALⅡ」

「丹 BALⅠ」で身につけた探究の基礎・手法を活用し、自分の興味関心に基づいたテーマを設定して探究活動を進める。

1年次はグループで研究進めるが、2年次では、より自己の興味関心に基づいて探究するため、個人研究に取り組む。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

【学びの深化と発表】 3年次 「丹 BALⅢ」「グローバル」

2年の探究をさらに継続・発展させたい生徒が選択できる科目として設置する。

それぞれの生徒が自らの興味・関心や進路に応じ、「グローバル」（世界へ発信）、「自分探究」（自分の進路へとつなげる）、「地域探究」（地域課題の解決へ向けさらに研究を進める）の3つのうちのどれかと関連したテーマを設定し、より深化した研究に取り組む。

その中で、英語によるプレゼンテーション、ディスカッションに対応できる技能を磨き、海外の高校生（台湾、韓国、カンボジア等）とオンラインで情報発信、意見交換をするなどして国際社会で活躍できる素地を養う。また、海外及び全国の地域探究型の高校とオンラインで結び、グローバルサミットを開催することで、高校生同士が互いに切磋琢磨して学びを深化させる場を設定している。探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

※探究活動発表会を R5 年度より新たに実施

「地域課題から世界を考える日」（全校発表会）

「知の探究」発表会を丹波の森公苑ホールを利用し開催することにより、地域をはじめ全国及び世界に本校の探究活動を公開し、ライブ配信も実施する。

【事業の目的等】

○ 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要性

本校の所在する丹波地域は、現在少子高齢化、過疎化、医師不足、基幹産業である農業の衰退、森林の放置、それを遠因とした土砂災害の発生、農作物への鳥獣被害など様々な今日的課題を抱えている。

一方、丹波地域には、豊かな自然や景観、歴史、あるいは丹波大納言小豆や黒大豆など、日本を代表する農作物や、世界的にも珍しい恐竜の卵殻化石が発掘され大きな話題となった地層（丹波篠山層群）など、世界に誇るべき地域財産を有している。

本校は、地域の進学校として、127年の歴史があり、卒業生も4万人を超え、丹波地域はもちろん、世界各国で活躍する多くの人材を出してきた。しかしながら、少子高齢化の影響を受け、丹波地域の人口が減少する中、生徒が半分以下に激減し、最大1学年12クラスが、5クラスとなっている。

一方で、世界ブランドの農作物等の地域資源に魅力を感じ、丹波地域へ移住する人は年々増え、令和2年度には前年度から100人増の225人となった。新たなビジネスを展開している人、自分らしい生き方を求める人など、今までの丹波市にはなかった多様な価値観が共存し、現在の丹波市の魅力を形成している。

本校は、平成20年に理数系の学びに特化して「普通科理数コース」を、理数系と文系の学びを融合させた「知の探究コース」として改編し、それ以降、探究活動を教育課程の中に盛り込むことで学校の特色化を図ってきた。本校が探究活動で培ってきた、地域との協働した学びは、生徒の主體的な学びの場となり、学校が活性化する源として、本校の中心的な活動として現在まで牽引してきている。そして「知の探究コース」は、令和6年度より「地域科学探究科」として、今まで以上に探究活動を充実させたカリキュラムをもつ学科へと生まれ変わる。本校が培ってきた学びを、充実・発展させることで、今まで以上に地域に信頼され、生徒の主体性を育てる学びを展開する。

【具体的な取組】令和5年度実績

- ・自然の力で心も体も健康に～地域の森林を活かした健康づくり～
- ・殺処分を減らすためにできること～地域猫と保護猫～
- ・燃えるごみを減らすために～生ごみについて考える～
- ・QRコード決済で地域を活性化しよう！
- ・子ども食堂

急速なグローバル化やICTをはじめとする技術の進展や少子高齢化の影響等、ますます変化が激しく予測困難な時代を迎える中で、社会の変化に柔軟に対応し、自らの力で新しい社会を切り拓く力を育成する高等学校であるために、地域との協働による高等学校教育改革推進事業により実施した研究開発を継続し、発展させる必要がある。そのために、生徒自らが地球規模の視点に立った課題や地域の魅力に着目し、持続的な発展や価値を創出するための資質能力を育成していく。

「知の探究コース」で培ってきた学びを発展させ、本質的な協働と個人の行動を重視した新学科「地域科学探究科」として、「多様な価値観を共有する人材育成」を目標に、地球規模で活躍する人材を育むことが本校の使命であると考える。

○ 学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

① 柏原高校のめざす生徒像

- ・主体的に物事にチャレンジする生徒
- ・多様な価値観を理解し、協働する生徒
- ・共生社会における地域の課題解決に寄与する生徒

② 取組の目的・目標

- ・地域課題を理解し、活性化や課題解決に向け積極的に関わることのできる資質能力を養う。
- ・他地域との比較や、世界的な課題との関連を探る活動を通じて、多様な価値観を有する共生社会を理解できる資質・能力を養う。
- ・生活体験や学び、地域交流から、他者と自分の差異に気づき、差異を生かす方法を考えることができる資質・能力を養う。

③ 育成を目指す資質・能力

コア教科・科目「丹 BAL」で課題解決型学習を推進し以下の力（例）を育成する。

	丹 BAL I	丹 BAL II	丹 BAL III
地域理解力	◎		
発案力	◎	○	
実践力		◎	○
関係構築力	○	◎	○
表現力	○	◎	◎
チャレンジ精神		○	◎
リーダー性	○	○	◎

※「地域探究科学科」の学びを展開していく中で、研究推進部を中心にコーディネーターや地域の方々の意見を聞きながら、育成したい能力については今後も見直しをはかっていく。

④ カリキュラムマネジメント

各教科の学びの設計において以下の内容を実践する。

〈特に育むべき資質・能力〉

- ・答えが一つとは限らない問いに対し、自ら解を求める思考力、判断力、表現力等の能力
- ・主体的に多様な人と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）

〈年次進行〉

- 1年次 探究活動の手法を学ぶ（課題の設定）
- 2年次 探究活動の実践（課題の分析、解決策のための立案と実行）
- 3年次 発表、キャリア形成へのさらなる行動

〈探究型学習の設計〉

教育目標からの目指す資質・能力の設定→評価方法の設定 → 授業計画の作成
 →授業案の作成と授業の実施方法の検討→ 授業関係やの役割の明確化
 学校の教育活動全体を見据え、対話を重視したシステムを構築する。

〔実施体制〕

○ 管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施に向けた経緯】

本県では、「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づき、県立高等学校に関する具体的な取組の考え方と方向性を示す「県立高等学校教育改革実施計画」を策定し、計画的に教育改革を進めてきた。

具体的には、「第一次実施計画」策定（平成 11 年度）以降、「学びたいことが学べる学校づくり」を一貫した基本理念とし、特に、普通科学年制においては、コースの設置に加え、複数の学校設定科目を設定し、生徒の興味・関心を重視した入試を行う本県独自の特色類型を設置してきた。この結果、専門学科の併置校を除く全ての普通科学年制高等学校にコースまたは特色類型のいずれかを設置するに至っている。（コース 15 校、特色類型 55 校）

普通科新学科については、令和 4 年 3 月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、設置の方向性を明確に打ち出すとともに、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進することとしている。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの内、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数次にわたって調整を進めてきた経緯があることから、2 校を申請することとなった。

令和 4 年度より入試方法の概要を含めた検討を行った上で公表し、1 年間の周知期間を経て、令和 6 年度に普通科新学科を設置する。

【事業の実施体制】

①「普通科新学科推進委員会（仮称）」の設置

- ・普通科新学科の設置校及び設置を目指す高等学校（15 校程度）を構成員とする「普通科新学科推進委員会（仮称）」を、高校教育課主導で設置
- ・定期的に研修会等を開き、各校の改編に向けた進捗状況を確認するとともに、探究活動を軸としたカリキュラムの展開等について共有
- ・本事業指定校には、モデル校として中心的な役割を付与

②本事業指定校が開催する運営指導委員会等への参画

- ・本事業指定校の運営指導委員会等に、高校教育課長が委員として参画

③本事業指定校に対する県独自の支援

- ・探究活動に特化した特別教室の整備（ICT 環境等の充実）
- ・担当指導主事による継続的な指導助言

④普通科新学科に関する周知

- ・普通科新学科の特長等に関する組織的な広報の展開（HP 等の充実）

【事業の管理方法】

①本事業指定期間中

- ・運営指導委員会における進捗状況の把握及び指導助言
- ・「普通科新学科推進委員会（仮称）」における報告の義務化

②本事業指定終了後

- ・普通科新学科設置後の成果報告を義務化
- ・本事業終了後の人的配置の検討

○ 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業評価の体制】

- ① 運営指導委員会での検証
 - ・ 大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価
 - ・ 外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価
 - ・ 高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な評価及び指導
- ② コンソーシアムでの検証
 - ・ コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価
 - ・ 高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な関与及び助言
 - ・ 校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価
- ③ 「普通科新学科推進委員会（仮称）」での検証
 - ・ 普通科新学科設置校及び設置を目指す高等学校を構成員とする委員会での相互評価
 - ・ 指導主事による各校の成果に関する相対的な評価
 - ・ 探究の指導についての研修会の実施
- ④ 兵庫県教育基本計画に基づく検証
 - ・ 「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づく年度末評価の実施

【事業評価の考え方・観点】

- ① スクール・ポリシーの適切な設定
 - ・ 生徒に身につけさせる資質・能力の明確化
 - ・ 資質・能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化
 - ・ 入学時に期待される生徒像の明確化
- ② 育成すべき資質・能力に関する評価方法の適切な設定
 - ・ 生徒の目標に対する到達度（ポートフォリオ、ルーブリック等）
 - ・ 生徒の興味・関心・意欲等に関する教職員の理解度
 - ・ 生徒や教職員、協働者に関するコーディネーターの理解度
- ③ 3年間を通じた体系的なカリキュラムの設定
 - ・ 教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定
 - ・ 学校設定教科を軸とした、探究活動中心のカリキュラムの設定
- ④ ICT等を活用した授業設定
 - ・ BYODをはじめとする情報端末機器を有効に活用した授業の展開
 - ・ 急激な社会変化等に影響を受けにくい学習環境の構築
- ⑤ コーディネーターの有効な活用方法の検証
 - ・ コーディネーターの得意分野を生かした学校組織での活用
 - ・ コーディネーターによる研究機関や地域社会との接続点の増加
 - ・ コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制の構築
 - ・ コーディネーターの関与によるワークライフバランスの組織的な担保

【具体的な評価指標(例)】

高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒の割合

【第3期ひょうご教育創造プラン指標】

区 分	R 2 年度	R 3 年度	R 4 年度	R 5 年度	最終目標
目標	83.0%	84.0%	85.0%	86.0%	87.0%
実績（見込）	82.5%	79.3%	78.6%	77.4%	

○ 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方法

①校内組織の改編

- ・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化
- ・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実
- ・職員会議等において、事業内容に関する情報を共有化

②普通科新学科設置検討委員会の設置

- ・普通科新学科設置に向けた準備委員会を校内に立ち上げ、コーディネーターを含む委員により、組織的に改編を推進

③運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年間3回以上開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者や自治体関係者、地域NPO等の委員から助言を受けながら、校内の教育活動に対して進行管理、評価、指導を実施
- ・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言の実施

④コンソーシアム運営委員会の開催

- ・コンソーシアム連絡会を定期的に開催し、カリキュラムについて、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築
- ・探究活動に関する情報やデータの提供や、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学びやICTを活用した海外との交流の機会を提供
- ・カリキュラムの実施にあたって、必要に応じて、人的、物的な支援を展開
- ・実行されたカリキュラムの成果に関する定期的な報告を受け、必要な助言を付与
- ・普通科専門学科としての特色ある教育課程の推進のため、各種分野において優れた知識・技能を有する社会人等を学校設定教科・科目、総合的な探究の時間等の講師として活用する特別非常勤講師を配置
- ・本県知事部局の国際交流課・国際経済課等との協力のもと、指定校と国内の大学や企業、海外の教育機関との連携強化や、本県SSH指定校等で組織する「兵庫『咲いテク』事業推進委員会」との連携を推進する事業の支援・拡大及び成果の普及を展開

※①～④を関連付けることにより期待される相乗効果

- ・探究活動は、専門的かつ広範囲的な内容を伴うことから、従来の高等学校の教育環境のみでは効果的な実施が困難な状況であるが、多方面の専門家や組織が、事業実施校の教育目標や実施内容に関する情報等を共有することにより、人的支援及び物的支援等を受けやすくなり、内容の深い学びを機能的に実現する可能性が高まる。
- ・生徒が個々に発案して進める探究活動を、校内外の様々な場面で公開していくことにより、生徒の課題意識が社会全体の課題とリンクしやすくなり、より大きな支援等を得た教育活動となり得る可能性が高まる。

○ 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

管理機関における研究開発の実績]

学校名	指定年度	指定機関	研究主題
神戸 長田 尼崎小田 宝塚北 三田祥雲館 明石北 加古川東 小野 姫路西 姫路東 龍野 豊岡	平成 16～令和 7 年度 令和 4～令和 8 年度 平成 17～令和 7 年度 令和元～令和 5 年度 平成 21～令和 8 年度 平成 22～令和 6 年度 平成 18～令和 8 年度 令和元～令和 5 年度 令和 2～令和 6 年度 令和 2～令和 6 年度 平成 25～令和 9 年度 平成 18～令和 8 年度	文部科学省	スーパーサイエンスハイスクール 将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を指定し、理数系教育に関する教育課程等に関する研究開発（実践的な研究を含む。）を行う。
姫路西 兵庫 伊丹 国際	平成 26～平成 30 年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度		スーパーグローバルハイスクール グローバルな社会課題を発見、解決できる人材やグローバルなビジネスで活躍できる人材育成するため、質の高いカリキュラムの開発・実践を行う。
兵庫 生野 柏原 佐用 村岡	令和 2～4 年度 令和元～3 年度 令和元～3 年度 令和 2～4 年度 令和 2～4 年度		地域との協働による高等学校教育改革推進事業 市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う。
御影 柏原 篠山鳳鳴 姫路飾西	令和 4～6 年度 令和 4～6 年度 令和 5～7 年度 令和 5～7 年度		新時代に対応した高等学校改革推進事業 学際領域学科又は地域社会学科等の設置に向けてのカリキュラム開発や実施体制の開発等、普通科改革の実現に資する先進的な取組を行う。

[申請校（兵庫県立柏原高等学校）における研究開発の実績]

平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月

スーパーグローバルハイスクールアソシエイト校に指定

平成 30 年 4 月 ひょうごスーパーハイスクール指定

平成 31 年 4 月～令和 4 年 3 月

文部科学省「地域との協働による教育改革推進事業（グローバル型）指定

○ 運営指導委員会の体制

所 属	氏名	主な実績
兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長	中瀬 勲	学識経験者
関西学院大学 名誉教授	高畑 由起夫	学校教育に専門的知識を有する
福知山公立大学 准教授	杉岡 秀紀	〃
東京大学大学院 教授	藤江 康彦	〃
丹波市観光協会 会長	足立 環	関係機関の責任者
丹波市教育委員会学校教育課 副課長	尾松 正章	関係行政機関の職員
兵庫県教育委員会高校教育課長	倉橋 良太	管理機関

○ 運営指導委員会が取り組む内容

年間3回程度運営指導委員会を開催し、各委員の専門性を生かして、令和4・5年度は、新学科設置に向けたカリキュラム開発、コーディネーターと協力した校内の体制整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報等の進捗状況、中学校等への広報活動等について助言を行う。令和6年度は、学科の設置年度となるため、入学生の状況等を把握し、カリキュラムの実施や関係機関との連携の深化等について、具体的な助言を行う。また、学校内外の継続的な連携・協働構築に向けての具体的な提案を行う。

〔学際領域学科又は地域社会学科における取組〕

- 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

1年

「探 BAL」（総合的な探究の時間）で、探究の基礎である「問い」、「情報収集・情報処理」、「分析・考察」、「まとめ・発表」を、それぞれ、グループでの簡単な探究的活動を繰り返す中で、実践的に探究の基礎を身につける。

また、ある程度制限されたテーマの中で探究の手法を学ぶために、SDG s から問題を焦点化し、丹波地域の「丹波市ゼロカーボンシティ宣言」を題材に、丹波市役所の協力のもと、基礎実践探究を展開する。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

2年

「丹 BAL I」で身につけた探究の基礎・手法を活用し、「丹 BAL II」で自分の興味関心に基づいたテーマを設定して探究活動を進める。

1年次はグループで研究進めるが、2年次では、より自己の興味関心に基づいて探究するため、個人研究に取り組む。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

また、「ポスター英語（教科横断型探究 I）」（探究に特化した学校設定科目）に取り組むことにより、論理的思考力や多角的視点を身につけ、多様な価値観を有する共生社会における様々な課題を解決していく力を育成する。

3年

「丹 BAL II」で探究してきた内容を「丹 BAL III」で深化させるとともに、大学等で開催される探究発表会に参加し、探究した内容を的確に伝えられるように、発表の構成の工夫、資料や機器の効果的な使い方等を実践的に育成する。あわせて、発表だけではなく、発表者の探究がより深まるような質問をしたり、助言をしたりするなど、聞く力も実践的に育成する。また、3年間の探究学習の集大成として、7月に「知の探究」発表会を丹波の森公苑ホールにて開催し、地域をはじめ全国、世界に配信する。

「丹 BAL III」において、「探究発表」では3年間の集大成としての探究発表の場を設け、表現力を培うことにより、研究や報告のスキルを向上させる。「自己探究」では、自己理解を深め言語化することにより、自分に合った効果的な表現スキルを身につけ、発言力及び発信力を育成する。「教科探究」では、3年間の集大成として学んできたことを活用して、自分の興味関心に基づいた探究活動を実施することにより、主体的・論理的思考力と多角的視点の成長を再確認する。

この他、「教科横断型探究 II」（探究に特化した学校設定科目）では、論理的思考力や多角的視点を身につけ、多様な価値観を有する共生社会における様々な課題を解決していく力を育成する。探究をさらに深化させる。

研究した成果は記録集を発行することにより、次年度以降の生徒が研究内容を確認できるようにする。

○ コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

これまでの探究活動からの協力体制を発展させる。新学科では生徒の興味ある課題に対して、持続可能な取組とするためにコンソーシアムやOBのつながりを活かした協働体制の構築を目指す。また、令和4年度より兵庫県版コミュニティスクールの地域連携強化校として指定を受け、学校運営協議会を立ち上げることで、コンソーシアムに参加する団体等との関係がさらに強化された。

①生徒の教育活動の支援体制

生徒が探究活動を進めるにあたり、地域の状況や課題の情報提供や共有、講演会の協力、フィールドワークの支援などを行う。また、課題解決型学習時に、課題解決のために、専門家や自治体等の組織につなげ、協働した取組により生徒の探究活動を支援する。

(具体的な支援内容)

自治体・商工会・観光協会等

- ・丹波市の姉妹都市（米国ワシントン州ケント市・オーバン市）との高校生地域活性化会議及び交換留学の実施
- ・各機関からの研究テーマに関する情報、データ等の提供 など

海外の大学、高校、NPO

- ・国際交流の推進、観光振興に関する研究
- ・ICTを活用した共同研究 など

②地域における探究活動が持続可能な体制づくり

地域の活性化をはじめ、関係者の利益を尊重した持続可能な体制をつくる。

- ・令和7年度以降もコーディネーターを配置できる環境づくり
- ・自治体等の継続的な人的支援
- ・企業の社会貢献事業（CSR）等の人的物的支援の検討
- ・生徒が主体的にフィールドワークに行ける校内体制および地域体制の構築

○ コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
丹波市	林 時彦	丹波市長 探究授業講師派遣
丹波市教育委員会	片山 則昭	丹波市教育長 職員研修会支援
丹波県民局	糟谷 浩行	丹波県民局長 探究活動支援
丹波市商工会議所	篠倉 庸良	会頭 探究活動講師・支援
丹波市観光協会	足立 環	会長 運営指導委員
丹波医療センター	大野 伯和	院長 医療セミナー講師
丹波市国際交流協会	十倉 直子	会長 国際交流の支援

※必要に応じて行を追加すること。

○ 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名(役割)
NPO 法人 imagine 丹波	鴻谷 佳彦 (探究授業推進・職員研修・関係機関調整)
丹波市市民活動支援センター	一宮 祐輔 (職員研修・関係機関調整)

当該者の主な実績

<p>NPO 法人 imagine 丹波 鴻谷 佳彦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省での運営指導委員 ・探究活動における特別非常勤講師 (県内 4 校実績) <p>丹波市市民活動支援センター 一宮 祐輔</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究活動における特別非常勤講師 ・丹波市内の高校による「モンブランプロジェクト」の支援活動コーディネーター

※ 7 行以内で記載すること

コーディネーターが取り組む内容 (勤務形態を含む)

<p>1 年目</p> <p>学校職員やコンソーシアム等の地域関係者との関係づくりを優先して実施し、令和 6 年度の新学科設置に向けた準備ならびに、コーディネーターの仕事の整理。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①地域や学校の抱える課題の言語化、可視化、共有化 ②コアとなるチームの編成 ③推進体制づくりの原案づくり ④「丹 BAL」を中心とした教科科目の参画授業を試験的に実施し、コーディネーターが探究活動にどのように参画していくかを研究する。 <p>2 年目</p> <p>(鴻谷氏、一宮氏は 1 日 7 時間 52 日、久保氏は 1 日 4.5 時間 104 日の勤務)</p> <p>1 年目の課題を分析し解決策を検討する。また、新学科の探究カリキュラムの設計提案及びカリキュラムマネジメントの提案。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①地域と学校の関係構築 ②探究活動における手法の提案 ③関係機関との細かな調整 ④学校外での学びの醸成を推進 ⑤探究活動上の生徒の悩み等へのアドバイス <p>3 年目 (新学科の設置)</p> <ol style="list-style-type: none"> ①探究活動における地域との関係構築及び関係強化 ②探究活動における手法の提案 ③探究活動における生徒へのアドバイス等 <p>今年度は非常勤とするが、今後は学校に常駐して、教員とともに関係機関との調整、授業において生徒の支援を行う。また、学校内外の協働体制を設計する中心となる。</p>

○ 学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

地域社会学科の設置は令和6年度であるため、令和5年度は以下の広報活動を行なった。

①学科の教育内容をまとめた広報用リーフレットとポスターの作成

中学生や保護者、地域の方に対して、教育活動や行事等を整理し紹介した。また、教育活動に関わっていただけるよう理解を促した。

ポスターの掲示には、学区内の駅やスーパー、公民館、商業施設等の多くの方に周知できる場所を選定して掲示した。

②オープン・ハイスクール等（中学生、保護者、地域への広報）

年間3回実施

第1回（7月）中学校訪問

生徒が出身中学校へ出向き、現在行っている探究活動の実践を発表する。あわせて、学校紹介を行う。

第2回（8月）オープン・ハイスクール・新学科説明会

学校紹介、探究活動等、高校の学びについてパネルディスカッションの実施。「国際交流について」、「先輩と語る」などの企画を生徒が中心になって実施し、学校を紹介した。

第3回（10月）秋のオープン・ハイスクール、進学相談会

学校紹介、探究活動の紹介、「高校生と語ろう（進学相談）」などの企画を、生徒が中心になって実施した。

③スマートフォン向けWEBページの作成

今後の教育活動を紹介できるようなサイトとして業者委託をする。

④学校関係者への説明

3月 入学者説明会（新入生、保護者への説明）

4月 PTA総会での説明（保護者への説明）

6月 中高連絡会（中学校教員への高校説明）

7月 学校評議員会

9月 学校説明会（中学生、保護者、中学教員への高校説明）

10月 教諭の市内中学校訪問（進路担当、学年担当に説明）

⑤探究活動発表会での広報

1月 地域課題から世界を考える日（校内発表会）

3月 「知の探究」発表会（丹波の森公苑ホール）

全国指定校、市内各学校、保護者、ライブ配信

〔実施計画〕

○ 3ヶ年の実施計画の概要

1年目

現行の内容について、継続実施。

- ① 1年生については、新たなテキストや講演会等により探究の基礎を学ぶ。
 - ・外部講師による丹波の魅力再発見 自治体の施策を学ぶ（地域を知る）。
 - ・地域の魅力や課題の中から、自分の興味あるテーマを設定し、フィールドワーク等の活動から探究を深めていく。
- ② 2年次の探究活動を、前半は1年次からの継続で地域活性化策のまとめ（地域を深め創る）、後半を台湾（沖縄）研究として、テーマを防災、観光、平和等に設定し探究を進める。自治体の対応の違いを比較する。また、地域課題や自己の将来に向けて研究を進める。
- ③ 学校設定科目の研究「(仮)自分探究」「(仮)地域探究」「グローバル」を設定。

新たな科目設定であるので、新学科設置検討委員会(仮)により現在の教科の授業との関連をどのようにはかるか、また、総合的な探究の時間や、LHR等で行っている内容とも関連させ、実施時間を適切に設定できるように研究する。

カリキュラム開発について、コンソーシアムである大学や、管理機関である県教育委員会等と連携し指導助言を受ける。学校行事（オープン・ハイスクール、修学旅行、進路探究 WEEK、インターンシップ、地域人材養成セミナーなど）との関連もはかり事前事後の学習につながるよう探究学習をプログラムする。

2年目

- ① 3学年で同一の曜日(木曜)に探究の時間を設定。LHRの時間と連続にして、課題研究、レポート作成、フィールドワーク、講演会、発表会等が実施しやすい時間割にする。
- ② 令和4年度に整備した「探究ルーム」の効果的な活用を研究するため、様々な活動で探究ルームを活用する。また、より効果的な探究活動が行えるよう、「探究ルーム」の充実をはかる。
- ③ 新学科の教育課程の枠組みを決定し全体計画作成を作成する。
- ④ 「丹 BALⅢ」、「自己探究」、「グローバル」の内容について研究する。
- ⑤ 学校設定科目「ポスター英語」「教科横断型探究」の内容について研究する。
- ⑥ 県教育委員会へ学校設定科目の届出

3年目 新学科設置初年度

- ① 1年次より「地域科学探究科」スタート
- ② 関係機関の連携協力による新たなカリキュラム（初年度：1年生）の実施
- ③ 新たなカリキュラム実施（2年生・3年生）に向けての校内体制の準備

○ 今年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	探究学習ガイダンス（1年） テキスト利用の探究手法講座（1年） 探究学習オリエンテーション（2年） 「教科横断型探究」プロジェクト会議	丹波新聞社 大学関係者
5月	授業公開週間、研究授業 「教科横断型探究」プロジェクト会議	地域の関係機関等 丹波市、丹波篠山市教育委員会、中学校
6月	全国コーディネーター研修 「教科横断型探究」プロジェクト会議	
7月	出身中学プレゼンテーション 学校運営協議会（コンソーシアム委員会） 「教科横断型探究」プロジェクト会議	丹波市、丹波篠山市教育委員会、中学校 市役所、大学、地元企業、観光協会、商工会議所等、 学識経験者、関係行政機関等
8月	オープン・ハイスクールでのプレゼン インターンシップ フィールドワーク引率 東京大学実習体験 「教科横断型探究」プロジェクト会議 運営指導委員会	丹波市・丹波篠山市教育委員会、 小学校、中学校、子育て支援センター 地元企業、観光協会、商工会議所等、大学 福知山公立大学、関西学院大学、東京大学等
9月	地域連携講師の授業（1年） 進路探究WEEK 授業公開週間 「教科横断型探究」プロジェクト会議	市役所、丹波医療センター等 チーたんの館、水分れフィールドミュージアム等 卒業生による講義、講演、模擬授業等

10 月	秋のオープン・ハイスクール 市内中学校訪問（新学科説明） 「教科横断型探究」プロジェクト会議	関係中学校、教育委員会等
11 月	全国コーディネーター研修 「教科横断型探究」プロジェクト会議	
12 月	福知山公立大学（田舎力甲子園）生徒発表	福知山公立大学 関係機関等 福知山公立大学、関西学院大学、甲南大学、 東京大学等
1 月	地域課題から世界を考える日 運営指導委員会	日頃の探究活動の成果を発表 学識経験者、関係行政機関等
2 月	探究発表会（県内他校） 3年記録集発行	神戸コンベンションセンター
3 月	「知の探究」発表会（丹波の森公苑） 全国フォーラム（東京） 全国コーディネーター研修（東京） 学校運営協議会（コンソーシアム委員会） 1年2年記録集発行	報告、意見聴取

○ 事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添2「目標設定シート」に記載。）

年3回程度計画している運営指導委員会、コンソーシアム運営委員会において事業の進捗状況を確認する。その中で改善策を検討する。オンライン等も適切に活用して、確認できるようにする。

①生徒の探究意欲の向上

グループ内での発表、学年での発表、発表会等において、課題への主体的な取組や視野の広まりが見られたか、また、生徒が発表する場が適切に設定されているかどうかを評価する。探究スキルの向上をはじめ、自己の興味関心に基づき主体的に探究に取り組む生徒の変容を評価する。

②教員の探究指導スキルの向上

探究活動を効果的に進めるために、生徒の探究スキルを育成する中で、教員自らも探究指導のポイントをおさえて活動を見守ることにより、自らの指導力を向上させることができるプログラムを構築する。

また、教科横断型探究の内容を検討するプロジェクト会議を立ち上げ議論する中で、各教科の授業においても、探究的な学びを展開できる指導力を、さらに向上できるようにする。

③外部機関との連携

大学や関係機関との連携が適切に実施できているかをみる。特に、研究授業や発表会を実施し、オンライン等を有効に活用して有識者より助言をいただくこと等を積極的に実施する。

コーディネーターを的確に活用することで、探究活動の渉外等が教員の過度な負担に繋がることを防ぎ、探究学習が持続可能な体制を構築する。

④中学生、保護者の視点

新たな学科が、生徒の成長、学校の発展につながり、柏原高校で学びたい、学ばせたいという魅力あるものになっているかどうかを評価する。

中学校での説明会、オープン・ハイスクール等でのアンケートの実施やWEBページを活用した意識調査の実施の仕組みを検討する。

⑤カリキュラムマネジメント

新学科設置により、探究に特化した科目だけではなく他の科目の授業においてどのように探究と関わっていくのかを、プロジェクト会議等で議論を深める。本校生に身につけさせたい力や、どのように進路実現をさせたいのか等について議論することで、学校の教育活動が効果的、機能的に連携できる体制を構築する。このことにより、教員が一丸となり教育活動に向かう変容を評価する。

〔成果の普及のための仕組み〕

○成果普及のための方策

- ①全国フォーラムでの発表
- ②県教委主催の各種研修会での先行事例として報告
- ③地域住民、保護者、中学生への広報、発表会等の活動
 - ・丹波の森公苑ホールにおける「知の探究」発表会
 - ・ホームページへの掲載
 - ・学校だより、探究通信(仮称)の発行
 - ・各探究活動発表会
 - ・オープン・ハイスクール、出身中学校でのプレゼンテーション
 - ・「地域課題から世界を考える日」
- ④大学等が実施する発表会、研究会への参加
- ⑤県民局主催丹波地域ビジョン推進委員会への参加
- ⑥全国、世界で活躍する卒業生を巻き込んだ、事業への理解と協力体制の構築

〔国の指定終了後の取組継続のための仕組み〕

○コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

地域社会学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりである。国の指定期間内で、それぞれの機関と連携・協働を強化し、学校内の学びから学校外での学びへと発展させた「地域全体の学び」となるよう更なる仕組みを構築する。

○コーディネーター機能の維持

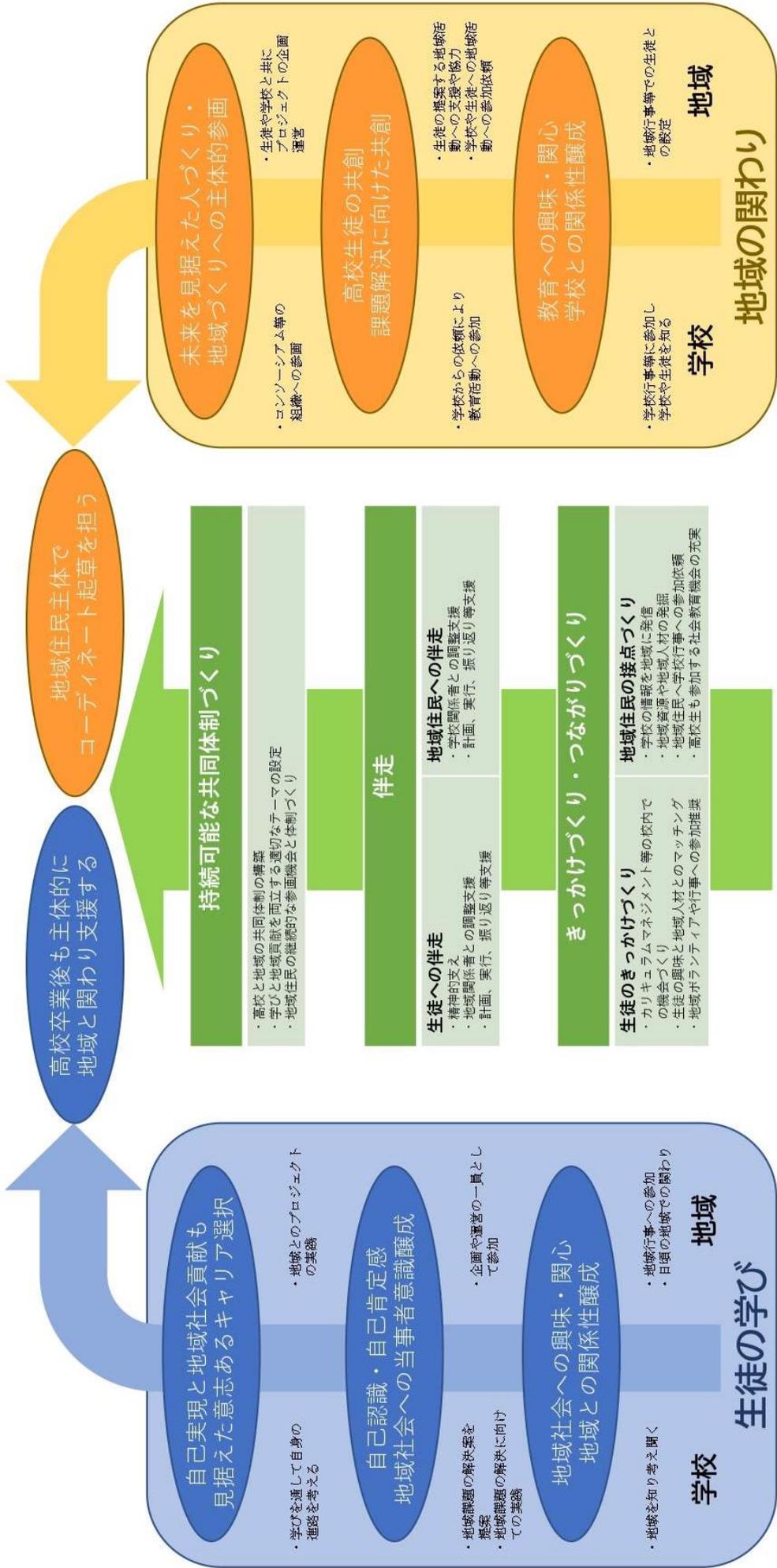
指定期間後のコーディネーター機能の維持については、

- ①コーディネーター加配に関する予算の確保
- ②教員のコーディネーター機能の移行
- ③企業協力による人員配置 等

の方策を含めて、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に検討し、方向性を決定する。

地元自治体の「地域づくりセンター」から職員を派遣して、コーディネーターとして市内の高等学校を連携して活動することも視野に入れたい。

地域の教育力や自治力向上し持続可能な人づくりの循環



高校と地域をつなぐコーディネート機能

(2) 事業結果説明書

〔事業の実績〕

○ 事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コーディネーター配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会指導・助言					○					○		
学校設定科目の研究開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
地域課題に関する課題研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
課題研究発表会						中間発表			○	○	○	○
広報及び情報発信			○		○		○	○				
教育課程・研究推進新学科設置検討・開発・実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○ 事業の実績の説明

① カリキュラムの研究・開発について

本校は特色ある学びの実現に向けた文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、現行の「知の探究コース」の改編を進めてきた。そして、令和6年度から新たに設置した「地域科学探究科」の2学年以降のカリキュラム内容について検討した。本校や地域の実態を踏まえ、高校生の多様な能力や適性、興味や関心に応じた学びを実現することが求められ、生徒が多様な学びに接することができるよう、学校設定科目としての教科横断型探究の内容を慎重に検討した。本校では、従来のコースでの取り組みを基盤にしつつ、「地域科学探究科」の主体的な学びの教育目標に準じた学習内容を策定した。

生徒がこれまでのコースで培ってきた学びを深化させる形として、新学科において協働と個人の行動を重視した「多様な価値観を共有する人材育成」を目標に掲げ、地元の丹波地域をフィールドとしながら、地球規模で活躍する人材を育成する学びを開発してきた。この中で、本校の特色ある取り組みの一つとして「教科横断型探究」を位置づけている。2年次から開始されるこの学校設定科目の学習内容については、プロジェクト会議を設置し、毎月計画的に議論を重ねてきた。その結果、「愛を探そう！」という抽象的なテーマを掲げ、全教科が関与する年間計画を構築した。この学びを通じて、従来の学習では得られなかった「学びの喜び」を生徒が知ることで、主体的な学習への取り組みを促進し、興味や関心に基づいた学びができる人材を育成していく。また、この取り組みを通じて、総合的な探究の時間を

7単位としたことのメリットを活かした教育活動を展開する。

さらに、スクール・ミッションおよびスクール・ポリシーに基づき、生徒に身につけさせるべき資質・能力を明確化するとともに、それを育成するために必要な教育課程に関する方針も策定した。また、入学時に期待される生徒像を共有し、スクール・ポリシーを設定した。さらに、育成すべき資質・能力に関する評価についても、従来のコースでの取り組みを新学科に引き継ぐ形で内容を精査し、引き続き検討を進めた。このようにして、3年間を通じた体系的なカリキュラムを構築し、学校設定教科を軸とした「教科横断型探究」に基づく計画的な年間学習計画を策定した。探究活動と教科横断型学習を柱とする新たなカリキュラムが設計されている点が大きな特徴だ。

今後は、普通科改革支援指定事業から外れた状況下でも、探究活動に関する情報やデータを提供するとともに、フィールドワークやインターンシップなど体験的な学びの機会や、ICTを活用した海外との国際交流の機会を生徒に提供していく。また、カリキュラム開発を進めるにあたっては、地域や関係機関からの人的・物的な支援が引き続き必要不可欠である。本校は、地域資源を活用しながらこうした取り組みを通じて生徒の主体的な学びを支え、多様な価値観を共有できる人材を育成していくことを目指したい。

ア スクール・ミッションに基づく地域科学探究科におけるスクール・ポリシーの策定

スクール・ミッション	
校訓「進取創造 質実剛健 敬愛和協」の理念のもと、主体的に物事にチャレンジし、多様な価値観を理解し協働する力を備え、人類や地域社会に貢献する人材を育成する。	
スクール・ポリシー	育成をめざす資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー） <ul style="list-style-type: none"> ① 探究活動を通して主体的な学びのスキルを培う。 ② 丹波から世界への視点を持ち、探究活動を通して多様な価値観を理解する。 ③ グループ研究を通して協働力を育成し、問題解決能力を培う。 ④ 探究活動の成果報告を通して他の取組も理解し、切磋琢磨する中での成長を促す。 ⑤ フィールドワークを通して実社会の理解を深め、自己探究によって自己理解も深める。
	教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー） <ul style="list-style-type: none"> ① 地域から世界への視点を持つ問題解決能力を育成するため、地域や大学と連携した探究活動を実施する。 ② 社会の仕組みや問題点を的確に捉える力を育成するため、フィールドワークを実施する。 ③ 論理的思考力を培うことで学習に対する意欲を育成するため、教科横断的探究を実施する。 ④ 積極的に表現するスキルを身につけるため、自己探究を通して自己理解を深める。 ⑤ 教科探究を通して、自己の興味関心に基づいた学習を提供する。
	入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー） <ul style="list-style-type: none"> ① 好奇心を持ち、意欲的に探究活動を行う生徒を募集する ② チームの一員として課題に対し、協力し合う意識を持った生徒を募集する。 ③ 地域社会へ貢献し、持続可能な社会の一員となる生徒を募集する。

イ 外部人材を招聘した講演会や探究活動に関する指導

探究Ⅰ & 丹 BALⅠにおいて、SDGs の 13 番に注目し、生徒が丹波市の「ゼロカーボンシティ宣言」の内容をより正確に理解し、生徒自身が疑問や課題を持ち、主体的に探究活動に取り組むことを目的に講演をしていただいた。

探究Ⅱにおいて、探究活動の魅力を理解するため、神戸大学農学部のゼミ生や京都大学の院生であり鳥取大学の助教の先生にご指導や講演をしていただいた。

また、「知の探究」発表会において、関西学院大学名誉教授が研究に向かう原動力になっている魅力についての講演をしていただく。

	内容	実施日	講師
1	講演「妄想だって研究だ！」	5月1日	鳥取大学助教 吉野 和泰
2	講演「丹波市ゼロカーボンシティ・アクション」	9月19日	丹波市役所 村上 寛幸
3	講演「持続可能な街の未来をデザインしよう！」	10月3日	鳥取大学助教 吉野 和泰
4	講演「物事が『分かる』とはどうゆうことか」	10月23日	鳥取大学助教 佐野 寛明
5	講演『「学校の生態学」をめざして：学校教育を探究する』	3月6日	東京大学教授 藤江 康彦

ウ 国際交流発表会

日時 令和7年3月3日

交流国 インドネシア、フィリピン、台湾、ミャンマー、ベトナムの高校生

対象 第2学年全員

内容 国際交流をしつつ自国の課題や問題点などを話し合い、探究の成果を発表し合い、意見交換を行った。

エ 令和7年度教育課程表（案）

第1学年

丹BAL I II IIIは総合的な探究の時間

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	25	26	27	28	29	30	31	32	
1年	現代の国語	言語文化	歴史総合	数学I	数学A	物理基礎	化学基礎	体育	保健	芸術I	英語コミI	論理・表現I	家庭基礎	情報I	丹BALI	LHR	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
																	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

「英語コミ」→「英語コミュニケーション」の略

第2学年

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
文系	論理国語	古典探究	地理総合	公共	数学II	数学B	体育	保健	英語コミII	発展国語I*	生物基礎	発展化学*	世界史探究	丹BALII	教科横断型探究I*	LHR	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
																	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

理系理科は「生物基礎・生物(4単位前後期)」と「生物基礎(2単位)」+「物理(2単位)」の2グループに分かれる。

第3学年

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
文系	論理国語	古典探究	体育	英語コミIII	論理・表現II	イメディリア	世界史探究	政治・経済	応用理科*	発展国語II*	発展数学*	数学C	教科横断型探究II*	丹BALIII	LHR	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
																2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

理系生徒が「数学III」を履修しないで「数学研究」を履修することは可能。

② 運営指導委員会の体制および取組

氏名	所属・職	備考
高畑 由起夫	関西学院大学 名誉教授	学校教育に専門的知識を有する
杉岡 秀紀	福知山公立大学 准教授	学校教育に専門的知識を有する
藤江 康彦	東京大学大学院 教授	学校教育に専門的知識を有する
中瀬 勲	兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長	学識経験者
足立 環	丹波市観光協会 会長	関係機関の責任者
尾松 正章	丹波市教育委員会 学校教育課副課長	関係行政機関の職員
倉橋 良太	兵庫県教育委員会 高校教育課長	管理機関

令和6年度の運営指導委員会は2回開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者、自治体関係者、地域関係機関等の委員から助言を受けた。また、委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言を行った。

	実施日	実施内容
第1回	8月26日 ※対面、オンライン同時実施	・新学科設置に向けての現状と課題の共有 ・3年間の探究関係カリキュラムについて ・現在の取組と探究活動について協議
第2回	1月30日 ※対面実施	・今年度の取組状況についての報告 ・今後の取組、推進についての指導・助言

③ コンソーシアムの体制および取組

所属	機関の代表者
丹波市	市長 林 時彦
丹波市教育委員会	教育長 片山 則昭
丹波県民局	局長 糟谷 浩行
丹波市商工会議所	会頭 篠倉 庸良
丹波市観光協会	会長 足立 環
丹波医療センター	院長 大野 伯和
丹波市国際交流協会	会長 十倉 直子
福知山公立大学	准教授 杉岡 秀紀
兵庫県教育委員会	高校教育課長 倉橋 良太

これまでの探究活動からの協力体制を発展させる。新学科では生徒の興味ある課題に対して、持続可能な取組とするためにコンソーシアムやOBのつながりを活かした協働体制の構築を目指し、人材育成のための探究活動に取り組み、学びの質の向上をめざした。特に今年度は、市役所の各課や市内の公共施設に協力いただき、地域課題解決のための学びを支援いただいた。

④ コーディネーターの配置および活動内容

所属	氏名
NPO 法人 imagine 丹波	鴻谷 佳彦
丹波市市民活動支援センター	一宮 祐輔

学校職員やコンソーシアム等の地域関係者との関係づくりを大切に、令和6年度の新学科設置に伴う業務に協力した。生徒の探究活動を進めるにあたって、生徒の振り返りから問題点の抽出や悩みへのアドバイス、地域の状況や課題、情報共有、関係機関との調整、フィールドワークの対応などで協力、支援を行った。

- 1 地域や大学と学校の架け橋
- 2 探究活動をするプログラム構築の協力、支援
- 3 探究活動における生徒の躓きを発見し、的確なタイミングでアドバイスができる環境づくり。

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
鴻谷 佳彦	日数	7	8	7	9	9	8	10	8	8	8
	時間	45	40	33	43	47	40	50	40	44	44
一宮 祐輔	日数	5	4	3	4	3	5	5	2	4	8
	時間	29	28	21	28	20	28	35	14	28	28

⑤ 管理機関における事業全体の成果検証、評価

運営指導委員会での検証として、担当指導主事による継続的な評価及び指導を行った。外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価、大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価を、次年度以降の事業につなげる。

コンソーシアムでの検証は、担当指導主事による継続的な関与及び助言を行い、コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価、校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価を基に事業の取り組みへの改善に活かす。

活動日程	活動内容
8月26日	第1回運営指導委員会 ・新学科の現状と課題の共有し、今後の方向性について協議
1月30日	地域課題から世界を考える日 ・生徒の発表会に出席し、探究活動の取組状況を把握するとともに、質疑に参加
	第2回運営指導委員会 ・今年度の取組について、成果・評価・課題を総括・指導助言 ・来年度の取組について、概要を説明し、協力体制について打合せ
3月6日	「知の探究」発表会を主催(丹波の森公苑) ・コースの生徒による探究成果発表の場を提供し、学びの機会を提供 ・県下全校及び全国普通科改革支援事業指定校に案内し、本校の取り組みを公開する

⑥ 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

県立柏原高等学校には、令和6年度の新学科設置に向けた支援として、探究活動を効果的に取り組むことを目的とした「探究ルーム」の整備に400万円の支援を行った。整備された「探究ルーム」では授業、探究活動などで生徒の学びの深化につながり、より充実した取組となるよう支援した。

⑦ 新学科の設置に伴う関係者（生徒、保護者、地域等）への説明の実施

学校の教育活動をあらゆる機会に発信して広報活動に尽力するとともに、オープン・ハイスクール等では中学生やその保護者、地域への説明を行う。オープン・ハイスクールは年間4回実施した。

第1回 6月 中学校訪問 生徒が出身中学校へ出向き、地域科学探究科についての時代背景から特色の説明と、学校紹介を行う。

第2回 8月 オープン・ハイスクール・地域科学探究科説明会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動等、高校の学びについてパネルディスカッション、国際交流について、先輩と語るなどを企画し、学校を紹介する。生徒が説明する。

第3回 10月 教諭による中学校訪問

本校教諭による市内中学校訪問を実施し、各中学校の3学年担当者や進路指導担当者に直接説明する機会を設け、中学生を直接指導される先生方に新学科の教育内容の理解を求め説明する。

第4回 11月 秋のオープン・ハイスクール、進学相談会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動の紹介、高校生と語ろう(進学相談)を行う。

今後、地域科学探究科の教育内容をまとめた広報用資料等を活用し、新学科の特色とその時代背景などを説明する。学校関係者や発表会での説明を通じて地域科学探究科への理解を促す。

⑧ 成果の普及のための仕組み

新聞等への取材依頼、ホームページへの掲載、オンラインの活用等を通じて、生徒の学びの質が高まるような工夫や取組を行った。

主な発表実績は以下の通りである。

9月中旬 本校探究中間発表

9月26日 普通科改革事業指定校発表会への出席

11月13日 指定校視察(広島市立美鈴が丘高等学校)

12月22日 「総合的な探究の時間」共創イベントにおける実践発表会(東京学芸大学)

1月30日 「地域課題から世界を考える日」(本校)

2月8日 兵庫県高等学校探究活動研究会(神戸市立御影公会堂)

3月6日 「知の探究」発表会(丹波の森公苑)

今後、大学等が実施する発表会、研究会への参加を継続すると共に、全国、世界で活躍する卒業生を巻き込み、事業への理解と協力体制を構築していく。成果の普及のためにオープン・ハイスクール、出身中学校でのプレゼンテーションに取り組めるよう関係者への理解と協力を促進する。

⑨ 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

学校とコンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくりに取り組む。新学科の特色ある学びを支えるため、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりが求められる。国の指定期間内、それぞれの機関と更なる連携・協働を行い、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「地域全体の学び」となるよう新たな仕組みを構築する。

同時に、国の指定期間後もコーディネーター機能が維持できるよう、コーディネーター加配に関する予算の確保、教職員のコーディネーター機能の移行、企業協力による人員配置等の方策を含めて、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に検討し、方向性を決定する。コーディネーターの配置では予算面での支援が必要である、連携先はあるが、講義等で協力いただく際の予算や資金面でのバックアップも必要である。調整に多大な労力を要することがあり、コーディネーターが入っても教員への負担が大きく、業務改善にも取り組んでいくことが必要である。

(3) 研究推進部活動内容

昨年度から研究推進部という部署を中心に、新学科の3年間の探究プログラムの構築を積み上げてきた。それをブラッシュアップしつつ、本校の特色ある取り組みの一つである教科横断型探究の年間プログラムの構築を目指した。

また、コーディネーターの活用についてもより持続可能な形態を検討しつつ、安定した3年間の探究的学びのプログラムを構築する運用をしつつ検討を繰り返した。

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	探究学習ガイダンス(全学年) 地元課題のワークショップ 教科横断プロジェクト会議	地元でご活躍されている方々(12名)
5月	教科横断プロジェクト会議 探究講演会	鳥取大学・学習関係企業 鳥取大学
6月	フィールドワーク 教科横断プロジェクト会議	地元企業
7月		
8月	第1回運営指導委員会 東京大学訪問(1年地探) 夏のオープンハイスクール、新学科説明会 フィールドワーク 教科横断プロジェクト会議	関西学院大学、東京大学、福知山公立大学、地元教育機関関係、観光協会、商工会議所等
9月	丹波市出前講座(ゼロカーボンシティ宣言) 教科横断プロジェクト会議 普通科改革推進事業発表会	丹波市役所、地元企業 文部科学省
10月	秋のオープンハイスクール 探究講演会 京都大学出前講座 中学校訪問(新学科説明) 全国コーディネーター研修	丹波市・丹波篠山市教育委員会、小学校、中学校 鳥取大学 丹波市内6校・丹波篠山市内5校 三菱UFJリサーチ&コンサルティング東京本社
11月	視察 教科横断プロジェクト会議	広島市立美鈴が丘高等学校
12月	東京学芸大学「探究の共創」	東京学芸大学
1月	地域課題から世界を考える日 フィールドワーク引率 第2回運営指導委員会 新学科プロジェクト会議	関西学院大学、東京大学、福知山公立大学、地元教育機関関係、観光協会、商工会議所等
2月	全国コーディネーター研修 全国コーディネーターフォーラム 令和6年度兵庫県探究研究会	文部科学省 文部科学省 兵庫県教育委員会
3月	「知の探究」発表会(6日実施予定) 大阪大学訪問 職員研修会	兵庫教育大学

1 通年

- 1) 教科横断型探究年間プログラム構築・探究指導體制の確立
3年間を見通した探究学習計画のシステム・体制づくり
現行のプログラムをブラッシュアップ
令和7年度から始まる教科横断型探究年間プログラムの構築
- 2) 新学科生徒募集
新学科の内容 PR
2度のオープンハイスクール(夏・秋)、各中学校への広報活動

2 時期別

- 1) 全国コーディネーター研修(8、10、2月)
全国の同事業を推進する学校・自治体・管理機関と意見交換
実施にあたっての指導を受ける
- 2) 発表会の企画・運営・引率
中間発表、地域課題から世界を考える日、「知の探究」発表会の企画・運営
関係機関、同事業推進校の招待、配信
外部へは、本年度は3回エントリー(甲南大、東京学芸、兵庫県)
- 3) 運営指導委員会
年間2回実施し、指導委員の方から意見をいただき、ブラッシュアップする。

3 課題

- 1) 探究活動の発表体制の構築
探究活動を実施される学校が増えたことにより、各発表会へのエントリー数が制限された上、そのエントリー数については、1~2ヶ月前に連絡が来る状況で、生徒たちへの発表の機会を提供することが不十分になってしまった。今後、発表の在り方を検討する必要がある。
- 2) コーディネーターの維持
本年度はコーディネーター2名の体制で行ってきたが、この体制を維持するため丹波市に支援を求めている。令和7年度については、不確定ながら何とか目途が付いているが、不確定要素が多く安定した体制を構築していく必要がある。
- 3) 探究活動の浸透
授業の実施を通して、より学校全体で指導できるような形態を少しずつ作りたい。

(4) 地域科学探究科（新学科）の3年間の探究プログラム

【教育目標】

地球規模の視点に立ち、地域との協働による探究活動を通して、社会の持続的な発展や価値の創出に貢献し、自分の将来にも結び付けていく論理的思考力や多角的な問題解決能力を育成する

単位数	1年			2年	3年	
	1学期	2学期	3学期	1～3学期	1学期	2学期 3学期
1	丹BAL I 探究基礎講座	丹BAL I 探究基礎実践	丹BAL I まとめ発表	丹BAL II 探究応用実践	丹BAL III 探究発表	丹BAL III 教科探究
1	X				丹BAL III 自己探究	
1					知の探究 I 教科横断型探究 I	知の探究 II 教科横断型探究 II

進路実現のための4つの充実した探究的な学習活動

①自身のスキルを磨く 充実した探究活動

丹BAL I
丹BAL II
丹BAL III
(探究発表)

テキストを利用しミニ探究
⇒ グループで探究基礎実践
⇒ 個人で自由な探究応用実践
⇒ 校外で探究発表会

②思考力を磨く 教科横断型探究

知の探究 I・II
(教科横断型探究 I・II)

様々な進路に対応した思考力を磨く
教科を超えた知識の組み合わせ
解を創造する思考力
身につけた力を社会で生かす

③自分の魅力を発見し 表現スキルを磨く自己探究

丹BAL III
(自己探究)

自己理解の深化と創造性を開花
自己の成長と自己肯定感の向上
自己の魅力を言語化するスキル

④教科の魅力を探究する 教科探究

丹BAL III
(教科探究)

学びたい教科の学びを深める
進路実現のための教科の探究
自己啓発やスキルの向上
成果や達成感の実感

テーマ： 愛を探そう

コマ数	背景時代	項目	テーマ	内容	コラボ教科		
1		オリエンテーション	愛について①		研究推進部		
2			愛について②		研究推進部		
3	古代史	家族愛	貴族の暮らし	貴族の住まい「寝殿造」 NHKの映像を用いて、貴族の住まいを知る	地公	家庭	
4			庶民の暮らし	食について、素材そのものの味を活かした料理であり、和食の原型となっていた時代	地公	家庭	
5		自然愛	万葉集の抜粋①	例：春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山	国語	英語	
6			万葉集の抜粋②	1) 国語での意味を理解してから、英訳を考える 2) 香具山について学習	地公	理科	
7		友情	庶民の遊び 紙鷹①	絵を用いて、当時の遊び方等を説明する。実際に身近なものを利用して作ってみて、グラウンドで飛べるかどうかを試す	数学	理科 美術	
8			庶民の遊び 紙鷹②		数学	保体	
9		恋愛	古今和歌集の抜粋①	例：伊勢の海の磯もとどろに寄する浪 恐(かしこ)き人に恋ひ渡るかも	国語	地公	
10			古今和歌集の抜粋②	和歌の意味を理解したうえで英訳してみる	国語	英語	
11		近世史	家族愛	色	江戸の文化から色について学ぶ	情報	家庭
12				江戸時代の子育て	日本その日その日の抜粋を読んで、当時の子育ては今とどう違うのかを話し合う Japan Day by Day	英語	保体
13	自然愛		お城の発展①	城の構造、位置 「姫路城」	地公	理科	
14			お城の発展②	石垣の積み方（勾配と反り）	理科	数学	
15	友情		和算①	和算誕生の経緯、和算とは 国語で問題の理解をしてから、和算で解いてみる	数学	国語	
16			和算②		数学	国語	
17	恋愛		日本の歌舞伎	歌舞の名作を取り上げる 「修禪寺物語」と頼家の仮面について	地公	音楽	
18			海外の戯作	音楽鑑賞し、有名シーンの解説する ロミオとジュリエット	英語	音楽	
19	近現代史		家族愛	洋食	食文化の洋風化について調べ、プロセスを表す図解表現を用いて洋食の調理手順を表し、思考を可視化する	家庭	情報
20				産業革命、蒸気機関	産業革命の始まりについて急激な工業化による歴史的な影響（子供や女性の労働など）を考察する	保体	情報
21		自然愛	水の東西	東洋と西洋で水に対する考え方の違い	国語	情報	
22			富岡製糸場	明治時代に西洋技術を導入した日本初の器械製糸工場	理科	地公	
23		友情	明治時代の学校で習う歌	日本と海外の童謡を視聴を、比較する	英語	音楽	
24			ビー玉遊び	明治中期から流行していた	保体	地公	
25		恋愛	海外：ロマン主義→ロマン派音楽	「自由」や「個性」、「想像力」を全面に押し出したのがロマン派音楽	音楽	英語	
26			国内：恋愛という言葉	恋愛という言葉は明治からといわれている 明治までにI love you を「月が綺麗ですね」と訳す	英語	地公	
27		現代史	家族愛	ライフプラン 「投資について」	ライフプランのシミュレーション、 複利の計算	数学	地公
28				食文化	カレーについて	理科	家庭
29	現代史	自然愛	汚染と健康	水俣病などの公害、「有機水銀」等	保体	理科	
30			自然界の黄金比と白銀比	植物・動物中の黄金比 ひまわり、蜂の巣 「遮光器土偶」「バルテノン神殿」「ピラミッド」から考える	数学	理科	
31		友情	友達って？仲間って？一緒に絵本を作ろう①	友情について改めて考える グループ分けて、チームで友情に関する絵本を作成する	国語	情報	
32			友達って？仲間って？一緒に絵本を作ろう②		国語	情報	
33		恋愛	博士の愛した数式	友愛数	数学	国語	
34			少子化問題、結婚について	出生率等のデータ分析	保体	数学	
35		総振り返り			研究推進部		

(5) 運営指導委員会

〔第1回運営指導委員会〕

○ 次第

○日 時：令和6年8月26日（月） 13：30～15：00

○場 所：柏原高校 柏陵会館1階研修室

1 開 会（15分）

■挨拶：校長 稲次 一彦

兵庫県教育委員会 高校教育課 指導主事 永野 祐一郎

■出席者紹介

■運営指導委員長の選出・挨拶

2 報告事項

■令和5年度の成果および「地域科学探究科」設置への取組（稲次校長）（10分）

- ・本校（普通科・新学科）のスクール・ミッション、スクールポリシー
- ・総合的な探究の時間（「丹BAL」）・学校設定教科・科目の開発…教育課程等の検討
- ・成果普及・情報発信

中学校説明会（6月）、オープンハイスクール（8月・10月）

市内中学校訪問（10～11月）で職員への説明、中高連携の強化

さまざまな発表会への参加・交流、学校訪問の積極的な受入れ、ホームページ等

- ・教員の意識・資質の向上…研究推進部を中心に各部署と連携
- ・コーディネーターの取組、関係機関等との連携・協力体制

<質疑応答>

■「地域科学探究科」の教育内容および各学年の探究授業・取組（研究推進部）（15分）

- ・1学年
- ・2学年
- ・3学年

<質疑応答>

3 意見交換（40分）

■「地域科学探究科」を含めた本校の生徒募集について

■教科横断的な学びについて

■コンソーシアムの連携が続く仕組み作り、コーディネーター機能の維持

■本校教員の探究指導力向上に向けての研修等の充実

4 今後の予定、その他（研究推進部）（5分）

- ・令和7年1月30日（木）「地域課題から世界を考える日」→午後：第2回運営指導委員会
- ・令和7年3月 7日（金）「知の探究」発表会（丹波の森公苑）

5 閉 会…稲次校長

○ 第1回運営指導委員会 議事録

出席者（敬称略）

高畑由紀夫（関西学院大学 名誉教授）
杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）
藤江 康彦（東京大学大学院教育学研究科 教授）
足立 環（丹波市観光協会 会長）
尾松 正章（丹波市教育委員会学校教育課 副課長兼指導係長）
永野 祐一郎（兵庫県教育委員会事務局高校教育課 指導主事）
稲次 一彦（兵庫県立柏原高等学校 校長）
高橋 義尚（兵庫県立柏原高等学校 教頭）
尾花 尚史（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部長）
谷本 育哉（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 教諭）
王 雅林（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 臨時講師）
鴻谷 佳彦（コーディネーター）

欠席者

中瀬 勲（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）
原 孝拓（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部副部長）
一宮 祐輔（コーディネーター）

1. 開会

- ・挨拶：稲次校長、永野 祐一郎指導主事
- ・運営指導委員長の選出：高畑 由紀夫（関西学院大学 名誉教授）
副委員長の選出：杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）

2. 報告事項

- ・「地域科学探究科」に向けた取組の説明（稲次校長）
 - ・ p 3を元にスクールミッション、スクールポリシーの説明
スクールミッション：校訓に準拠
スクールポリシー：「地域科学探究科」は探究と体験を重視
カリキュラムポリシー：フィールドワークなどを通じて地域から世界への視点
教科横断型探究を進めていく
- ・ R 5 の成果（稲次校長）
 - ①丹 BAL I、II の導入
 - ②学校設定科目による、教科横断型探究について
 - ③成果普及、情報発信について
課題：“地域”“探究”という新学科へのイメージ、中学校訪問による新学科の説明
 - ④オープンハイスクールのアンケートについて
中学生と保護者からの意見
 - ⑤教員の意識・資質向上
探究活動に対する共通理解と指導力の向上

⑥コーディネーターの取り組み

課題：本事業終了後のコーディネーターの確保

⑦関係機関等との連携・協力体制

- ・研究推進部の活動内容について（尾花）
- ・昨年度に研究推進部を発足、「地域科学探究科」の7単位の中身について
- ・八幡高校（福岡県）の教科横断型探究の視察
- ・新学科プロジェクト会議
- ・京都大学出前講座を本年度も実施
- ・甲南大学リサーチフェスタへの参加
- ・教科横断型探究による魅力化 テーマ「愛を探そう」
- ・実施計画 p 11～
 - ①教科横断型探究の中身について
 - ②持続可能な柏原高校の探究に向けて

3. 質疑応答（敬称略）

高畑 Q. オープンハイスクールのアンケートの解答者のうち、入学者は何名くらい？
「大変よかった」と解答している生徒は入学しているのか？というようなクロス集計はしているのか？

A. クロス集計は実施できていない

Q. 「愛を探そう」というテーマは来年度だけのテーマなのか？

このテーマは学年ごとに変えるのか？

A. テーマは数年は継続予定

提案. 日本語の“愛”には様々な意味があることを前提に注意して取り組むと良い

“愛”には様々な世界があることを生徒に伝えることが重要

杉岡 Q. 1年生の地域科学探究科への満足度などのアンケートはあるのか？

A. 生徒へのアンケートは現在実施していない。年度末に実施予定。

1年生の期間は普通科と大差がないので、新学科の良さを感じるのは来年度からでは？

Q. 進路実現に向けた、探究担当者と進路指導部の連携について。

A. 連携できている。総合型選抜による入試に向けて。

進路指導部主導による東京大学実習体験（8月）や進路探究WEEKを実施している。

Q. 丹波市内の3つの高校での共同（未来プロジェクト以外）はあるのか？

A. 3校での連携は不十分。丹波市や県の支援による、学校ごとの魅力化も目指したい。

藤江 Q. 地域科学探究科の1年生の授業の姿は、普通科の生徒と違いはあるのか？

授業のスタイルにも普通科との違いはあるのか？

A. 探究の授業における、スピードや発想力はぜんぜん違う。

普通教科は、教科によって試験内容が違う場合もある。

地域科学探究科は個性的な生徒が多い。クラス内で個性を尊重できている。

Q. 教科横断型探究の中身の選定は学ぶ時期も重要。35時間の授業がうまくいくような仕掛けを計画しているのか？

A. 抽象的なテーマにしたことで、学ぶタイミングの問題は回避できる。

足立 意見：「愛を探そう」は壮大なテーマ。“愛”には失恋などネガティブな面もある。
教師のよる心のケアも大事。

尾松 Q. R6年度入学の1期生の学びのプロセスを、次年度以降も引き継いでいくのか？
学年ごとに違うアプローチをしていくのか？

A. 昨年度から学年ごとに探究の発表内容を冊子にして、各教室に設置している。
3月の発表には1年生も参加するので、先輩の発表を見聞きして興味を持てば同じテーマで探究をしてもよい。

鴻谷 報告：丹波市の支援により黎明館に自習室を設置

杉岡 意見：授業以外で自発的に探究に取り組みたい生徒の活動の場の用意も必要になってくる。
学校のカリキュラム以外の生徒の探究を応援する仕組み（行政による）が重要

高畑 意見：地方行政における高校（学校）の役割は重要

藤江 意見：先輩の探究の発表が冊子にまとめられ、後輩のテキストになっているのが良い。
地域科学探究科の生徒だけでなく、普通科の生徒も探究を通して普通科目の授業への取り組みが変わったり、大学入試への姿勢が変わることが理想的。

4. 今後の予定（尾花）

- ・ R7 1月30日（木）午前：「地域課題から世界を考える日」
午後：第2回運営指導委員会
- ・ R7 3月6日（木）「知の探究」発表会

5. 閉会

- ・ 学校長挨拶

〔第2回運営指導委員会〕

○ 次第

○日 時：令和7年1月30日（木） 14：00～15：30

○場 所：柏原高校 柏陵会館1階研修室

1 開 会（10分）

■挨拶：校長 稲次 一彦

■出席者紹介

2 報告事項（進行：高畑委員長）

■令和6年度の探究活動および新学科「地域科学探究科」の取組（研究推進部）（25分）

・「地域科学探究科」の教育課程及び教科横断型探究の年間スケジュール

・視察訪問（広島市立美鈴が丘高等学校）

・研修（カシオ計算機㈱・文部科学省・三菱UFJリサーチ&コンサルティング東京本社）
普通科改革支援事業指定校発表会（文部科学省）

・他府県からの学校訪問受け入れ…大阪府立狭山高等学校、大阪府立東百舌鳥高等学校
福岡県教育委員会、福岡県立田川高等学校
京都府立山城高等学校

・本校生徒の3年間の実態調査と全国平均（東京学芸大学）

・本校職員の3年間の意識調査結果

・各学年の探究学習年間計画

第1学年（丹BALⅠ&総合的な探究の時間Ⅰ）

第2学年（探究Ⅱ・丹BALⅡ）

第3学年（総合的な探究の時間Ⅲ・グローバル）

〈質疑応答〉

3 意見交換（40分）

■本校の地域科学探究科の魅力発信について

・成果の普及のための仕組み…オープンハイスクール（8月・10月）

中学校訪問と職員への説明（10月）、情報発信

■各探究授業の発展、教科横断的な学びについて

■コーディネーターの活用

■本校教員の探究指導力向上を支援する研修等の充実

4 今後の予定、その他の連絡（10分）（研究推進部）

・令和7年2月8日（土）「兵庫県高等学校探究活動研究会」（神戸市立御影公会堂）

・令和7年3月6日（木）「知の探究」発表会（丹波の森公苑）…午前

5 閉 会

■挨拶：兵庫県教育委員会 高校教育課 主任指導主事 浅川 規幸

○ 第2回運営指導委員会 議事録

出席者（敬称略）

高畑由紀夫（関西学院大学 名誉教授）
藤江 康彦（東京大学大学院教育学研究科 教授）
中瀬 勲（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）
足立 環（丹波市観光協会 会長）
尾松 正章（丹波市教育委員会学校教育課 副課長兼指導係長）
浅川 規幸（兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事）
稲次 一彦（兵庫県立柏原高等学校 校長）
高橋 義尚（兵庫県立柏原高等学校 教頭）
尾花 尚史（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部長）
原 孝拓（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部副部長）
谷本 育哉（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 教諭）…記録
王 雅林（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 臨時講師）
鴻谷 佳彦（コーディネーター）
一宮 祐輔（コーディネーター）

欠席者（敬称略）

杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）

1. 開 会

- 挨拶：校長 稲次 一彦
- 出席者紹介

2. 報告事項（進行：高畑委員長）

- 令和6年度の取組（尾花）
 - ・「地域科学探究科」の教育課程及び教科横断型探究の取組について
 - ・研修（カシオ計算機（株）、文部科学省）
 - ・コーディネーター研修（三菱UFJリサーチ&コンサルティング東京本社）
 - ・視察訪問（広島県立美鈴が丘高等学校）（原）
 - ・中学校訪問について…丹波市、丹波篠山市
 - ・他府県からの学校訪問受け入れ…大阪府立狭山高等学校、大阪府立東百舌鳥高等学校（10/23）
福岡県教育委員会、福岡県立田川高等学校（11/21）
京都府立山城高等学校（R7/1/29）
 - ・本校生徒の3年間の実態調査と全国平均（東京学芸大学）
 - ・本校職員の3年間の意識実態調査結果
 - ・各学年の探究学習年間計画
 - ・第1学年（丹BAL I & 総合的な探究の時間 I）
 - ・第2学年（探究 II & 丹BAL II）
 - ・第3学年（総合的な探究の時間 III & グローカル）

3. 意見交換（敬称略）

- 本校の地域科学探究科の魅力発信について
藤江 Q. 探究学習の記録冊子は、柏原高校の魅力発信に何か活用する予定なのか。
A. 記録冊子は魅力発信というより、探究の継承を主な活用目的としている。
視察に来られた高校には配布しているが、中学校訪問では配布等はしていない。

高畑 Q. 10月の新学科説明会で話した新学科の魅力は？
A. 探究の単位数の増加。探究に重きをおいて進学実績につなげていく思いを伝えた。世間全体の変化、大学入試の変化など。

足立 Q. 探究の魅力を発信するターゲットは？
A. ターゲットは中学生、中学生の保護者。
Q. 地域への発信も重要では？
A. 来年度から丹波市から予算をいただき、SNSの活用などを計画している。

中瀬 柏原高校で学んでいる在校生が、中学校へ出向き話をするのが重要である。

尾松 高校の中での変化は、中学校の教員には見えにくい。伝わる情報はごく一部。高校の教員が中学校訪問で説明したり、高校の発表会に参加していただくような機会が少ないと伝わりづらい。できるだけ交流をもつことが重要。

藤江 どのように発信すれば中学生に伝わりやすいのか、高校生の意見を参考にしているか。

■各探究授業の発展、教科横断的な学びについて

高畑 Q. 「愛を探そう」における細かなテーマは教員の専門性にあわせて設定したのか？
A. それぞれの時代の様々な「愛」を書物や出来事から見出していく学びが目標。教員の専門性より、テーマを先に設定した。数年はこのテーマを継続していく予定。

中瀬 Q. 「愛を探そう」のテーマで教科横断型探究をすることは教員の負担では？
A. このテーマは、様々な教科の教員からの提案のなかから完成したもの。

■コーディネーターの活用

校長 文科省の予算は今年度で切れてしまうが、丹波市の協力でコーディネーター1人の予算を用意できる予定。DXハイスクールの認定を受けることができれば、追加で人件費を用意できる見込み。

中瀬 国立公園のアクティブ・レンジャー制度が良い参考になるかもしれない。

■本校教員の探究指導力向上を支援する研修等の充実

中瀬 県立人と自然の博物館での教員研修を活用してみてもは。

高畑 兵庫教育大学との連携はどうか。

4. 今後の予定、その他の連絡（研究推進部）

- ・令和7年2月8日（土）「兵庫県高等学校探究活動研究会」（神戸市立御影公会堂）
- ・令和7年3月6日（木）「知の探究」発表会（丹波の森公苑）…午前

5. 閉会

■挨拶：兵庫県教育委員会 事務局高校教育課 主任指導主事 浅川 規幸

(6) 視察訪問

○受け入れ

日程	訪問団体
10月23日(水)	大阪府立狭山高等学校 大阪府立東百舌鳥高等学校
11月21日(水)	福岡県教育庁教育振興部高校教育課 福岡県立田川高等学校
1月29日(水)	京都府立山城高等学校

○視察

広島市立美鈴が丘高等学校視察報告

学校改革の方法・現状に向けて先進的な取り組みを行っている広島市立美鈴が丘高校を視察した。美鈴が丘高校は広島市の西の住宅地の一端にあり、周辺から多く生徒を集めていたが、同地域の高齢化が進み生徒募集が難しくなったことや数年前に私立に多くの生徒が流れてしまったことがきっかけで、教員間に危機感が生まれ、改革の機運が高まった。本校は今年の生徒募集で大きく定員を割り込んでしまった。中学校訪問を前年度と比べ早い段階で行うなど打てる手段を打ったが抜本的な解決策であるとは言い難い。そこで学校改革を大々的に打ち出している美鈴が丘高校への視察を決めた。

教員文化の違いに驚いたことが一番大きかったが、「改革すること」に関しては生徒の意見を受け入れることを重要視していることが伝わってきた。生徒自身に学校全体に向けた発言権があり、やりたいこと・変えたいことを教員に向けてプレゼンするなど意欲的であった。また、その内容もわがままなものではなく、生徒たちの意見をまとめ合理的に考えられたものであった。このような風土ができたのは、生徒の発言を受け入れてきたからだとする。オープンハイや中学校訪問などの広報では、多くの部分で生徒が活躍する。学校説明に関してもほとんどを生徒が語るなど教員の出番はほとんどないとのこと。中学校訪問でも教員だけでなく、生徒も広報部として連れていき模擬授業や学校説明で活躍するなど生徒が自分の言葉で説明する機会を多く設けているようである。ここでの活動を通して自分に自信が持てたこと、人前で発言できるようになったことも大きな成長だが、それだけではなく、これを成し遂げるために多くの数練習し、教員とコミュニケーションをとり続けたことが風土の根底にあるのではないかと考えた。実際に広報に関しては中学生からの評判がとても高く、これまでなかったような高評価を受けるようになったとか。合田校長先生も生徒の話聞くこと、そしてそれに対して最初から反対意見を持たないようにすることが大切であると説く。聞いてから No を言うことと聞く前から No を言う(もしくはその姿勢をとる)ことは意味が大きく異なる。まずは生徒の話聞くこと、そして否定しないことが大切だということを確認することができた。一教員としてはこのことに関してできていく人が多く感じる。それは生徒が1対1の場で本音を漏らすことが多いからである。教員との信頼関係ができていく証拠である。しかし、学校全体となった時、その体制がとれているとは思えない。学校の体制に不満があり、口にすれど行動に移そうとする生徒がいないからだ。体制側としては当然大人の事情で突き返さなければならないこともあるが、生徒側の意見を体制側として受け入れる機会が乏しいことが柏原高校の大きな課題となっていないのではないかと。生徒側は自分の意見が通り改革が実現すること、もしくは改革に向けて話し合いを繰り返し、結果 No を突き付けられても話し合いのもと双方の意見を理解するから納得することができる。本校の現状では「意見を言っても仕方ない。」という空気感になってしまっている。それを打破するためにも、まずは生徒の思いに耳を傾け、変化を起こすか、徹底的な話の場を設けることが、主体的な生徒を育てる大きなきっかけとなるのではないだろうか。(もちろん担当教員の負担大、生徒会との仕事のすみわけ等ほかの課題も山積みであるが…)

体制や条件が違うため取り入れて実施できることは多くない。しかし、校長先生は終始「生徒の主体性を…」、「意見をぶつけ合う機会を…」とおっしゃっていて、それだけ生徒のその部分を育てたいという思いが伝わってきた。本校も探究活動の体制が少しずつ固まりはじめ、生徒自身が自己の内面と対話する機会が増えている。あとは教員がその生徒の思いをどう受け止めるかにかかっていると強く感じた。

2. 各学年の取り組み

(1) 第1学年「探究I & 丹BALI」

○年間計画

日程		行事	学習内容
4 / 18	木	探究学習って何	オリエンテーション(研究推進部)
4 / 25	木	探究学習の流れ・課題を設定しよう①	
5 / 2	木	課題を設定しよう②	
5 / 9	木	課題を設定しよう③	
5 / 23	木	情報を収集しよう①	アウトラインを書こう①
5 / 30	木	情報を収集しよう②	アウトラインを書こう②・発表をしよう①
6 / 6	木	情報収集・整理分析①	発表をしよう②・まとめ
6 / 20	木	情報収集・整理分析②	逆の立場に立って論証する。①
6 / 27	木	まとめ・表現をしよう	逆の立場に立って論証する。②
9 / 5	木	ガイダンス 2学期以降の説明	世界の問題(SDGs)の丹波市の取り組みについて調べていき8つの目標があることを確認する。
9 / 12	木	文化発表会	
9 / 19	木	丹波市役所講演 ゼロカーボンシティ宣言	市役所の話聞いて8つの内、どの目標について研究をするのかの調査をし、それをもとに班分けをする。
9 / 26	木	自分の興味を持ったアクションで 基礎研究	講演を聞き、自分が気になるアクションについて調べ、提出。 今後行うアクションをフォームにて決定する。
10 / 3	木	探究基礎実践①テーマ設定① 組別活動開始	テーマ・問い・仮説の設定について1学期の振り返り テキストを見ながら決め方を確認
10 / 10	木	探究基礎実践②テーマ設定②	テーマ・問い・仮説の設定 テキストを見ながら決め方を確認
10 / 17	木	2学期中間考査	
10 / 24	木	文化講演会	
10 / 31	木	探究基礎実践③テーマ設定③	テーマ・問い・仮説の設定 テキストを見ながら決め方を確認
11 / 7	木	探究基礎実践④情報収集①	仮説の証明に向けたデータの収集 テキストを見ながら進め方を確認
11 / 14	木	探究基礎実践⑤情報収集②	仮説の証明に向けたデータの収集 テキストを見ながら進め方を確認
11 / 21	木	探究基礎実践⑥分析調査①	データの分析、論理の構築 テキストを見ながら進め方を確認
11 / 28	木	探究基礎実践⑦分析調査②	データの分析、論理の構築 テキストを見ながら進め方を確認
12 / 12	木	探究基礎実践⑧まとめ①	研究内容をスライドにまとめる。 テキストを見ながら進め方を確認
12 / 19	木	探究基礎実践⑨まとめ②	研究内容をスライドにまとめる。 テキストを見ながら進め方を確認
1 / 9	木	発表準備・探究基礎実践記録集作成	発表の練習 記録集用の原稿作成
1 / 16	木	発表準備・探究基礎実践記録集作成	発表の練習 記録集用の原稿作成
1 / 23	木	発表準備・探究基礎実践記録集作成	発表の練習 記録集用の原稿作成
1 / 30	木	地域課題から世界を考える日	
2 / 6	木	探究基礎実践記録集作成	探究基礎実践記録集作成
2 / 13	木	探究基礎実践記録集作成	探究基礎実践記録集作成

○丹 BAL I ・ 探究 I 活動報告

第1学年主任 西本 秩抄

第1学年の探究では、今後高校生として本格的な探究活動を行うための基本的なスキルを学んだ。テキストを用いて進めることで、生徒も担当教員も次の流れが分かり、系統立てて学ぶことができた。

1学期には、ミニ探究を通して探究の基本的な技法を学んだ。「高校生が22時以降にスマホに触ることに対して賛成か、反対か」という生徒にとって身近なテーマのもと、情報収集をし、それを整理して仮説を立てるという一連の流れに、個人やグループで取り組んだ。毎時間の初めに、自分たちの取り組みの流れがうまくいっているのかを確かめられるよう講義や解説があることで、生徒たちも迷いながらも着実に進めることができ、基本的なスキルを身につけることができた。

その経験をもとに、2学期には1年次でのメインの探究に取り組んだ。丹波市役所の方に「ゼロカーボンシティ宣言」についてのお話をいただき、生徒の興味関心から8つのテーマ（食事・節水・節電・分別・ファッション・脱炭素製品・再生可能エネルギー）で探究を行った。大きなテーマは同じでも、最終的には各班実に様々な探究テーマが並び、生徒たちの発想の幅広さに驚いた。最初の調べ学習の段階は、1学期の実践が生きており、スムーズに行うことができた一方で、仮説を立て、それを検証することには難しさを感じた班が多くあった。しかしその都度グループで話し合い、修正しながら自分たちなりの答えを探していく作業を通して、生徒たちの成長していく姿を見ることができた。

そして2学期後半からは、1月の「地域課題から世界を考える日」での発表に向けて、スライド作成と発表内容のまとめに取り組んだ。スライドの作成についても、発表する（聴衆がいる）ことを意識したものが多く、生徒たちの工夫の跡が見られた。最後には発表内容を論文の形にし、1年次のまとめとした。各クラスでの取り組みの様子（感想）は以下のとおりである。



1組：1組は今年度から「地域科学探究科」と名称とカリキュラムが変わった。1年時の探究活動は2年次の探究Ⅱに向けた布石となることもあり、スキルを学ぶとともに探究活動に対する興味関心を持たせるように取り組んだ。調べ学習は中学から取り組んでいることもあり非常にスムーズに行っていた。「ゼロカーボン」のテーマ設定も非常にユニークな発想が数多くあり来年度の取り組みに期待ができるものとなった。ただ、まだ調べ学習の域を超えた活動があまりないので、来年度はフィールドワークなどに積極的に出向き、見聞を深めてほしい。

2組：授業内の活動では、当初興味に基づいた問いの設定や仮説といった概念の理解に苦戦した。グループに分かれてからは、班員同志で質問しあったり、調べ、執筆、データ整理等に役割でわかれて活動したりと、活動を通したコミュニケーションスキルの上達が見て取れた。発表では、内容はもちろん、デザインなどの視認性、聴衆にどうメッセージを伝えるかまで考えた班も見られ、この授業を通して多くの学びがあったように感じられた。

3組：1年次ではいかにして探究を進めるかを学んだが、ただ知るだけではなく、実際に自分たちの力で実践してみることや、スライドや論文という形にするまでには大きな苦労があった。しかし、生徒は持ち前のポジティブさや、仲間とのコミュニケーション、協力を大切にして取り組む中で上手に壁を乗り越えていったように感じた。自分だけで考えたり、ただの調べ学習で終わったりするのではなく、力を合わせて探究を進められた今回の経験をぜひ次のステップに生かして欲しいと思う。

4組：1学年の探究では、探究活動の流れと必要なスキルを学んだ。どの班も問いをたてることの難しさに悩んでいた。また、調べていくうちに矛盾を感じ、問いを変更する班もあったが、しっかりと探究ができていた証拠であった。共有しながら資料を作成していたので、班全員が協力して取り組むことができていた。「丹波市のゼロカーボン宣言」の同じ講座でも、同じ問いにならず、各班でさまざまな視点から見ることができていたように感じた。

5組：1学年では探究活動を行う上での基礎的な技術の習得に取り組んだ。問いをもとに仮説を立て、検証を行い考察することで新たな問いにつなげるというサイクルを実際に経験してみたが、調べ学習との違いに戸惑う様子が見られた。しかし、仮説の設定や仮説を検証するための情報収集などは探究活動において重要な活動であると学び、各班で協力しながら、前向きに活動をすることができていた。

以上のように、どのクラスも戸惑ったり壁に当たったりすることはあったものの、非常に前向きに取り組むことができていた。また、特に指示をしなくてもグループ内での役割分担がうまくできており、グループ内の衝突などがほとんどなく、みんなが協力して探究活動を進めている姿が印象的であった。まだまだ課題点はあるものの、この取り組みの形を継続し、来年度はさらに深い探究活動になることを期待したい。



○令和6年度「丹 BAL I & 総合的な探究の時間 I」1年間の振り返り結果

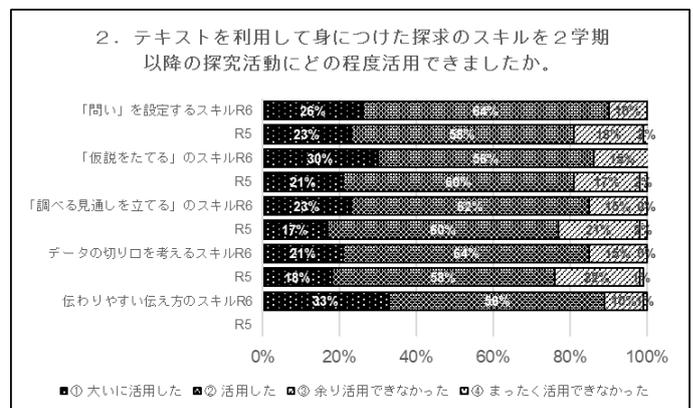
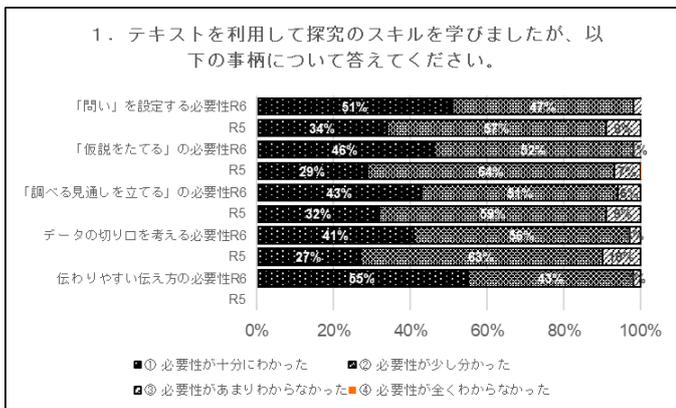
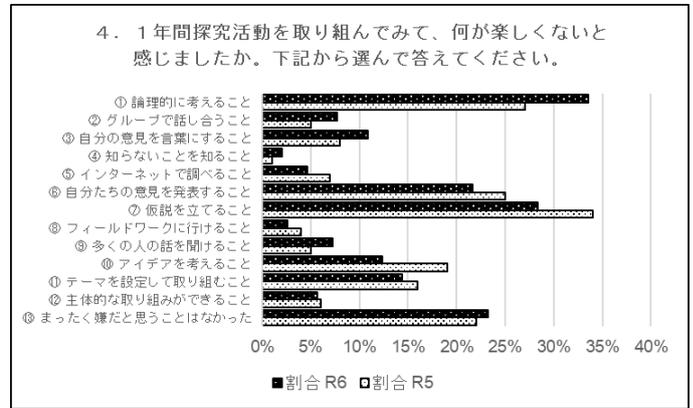
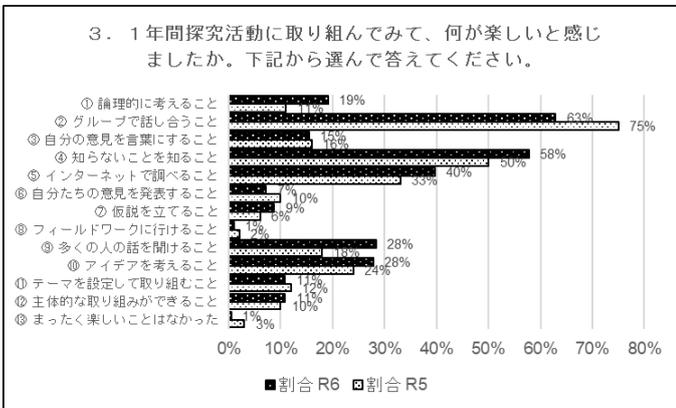
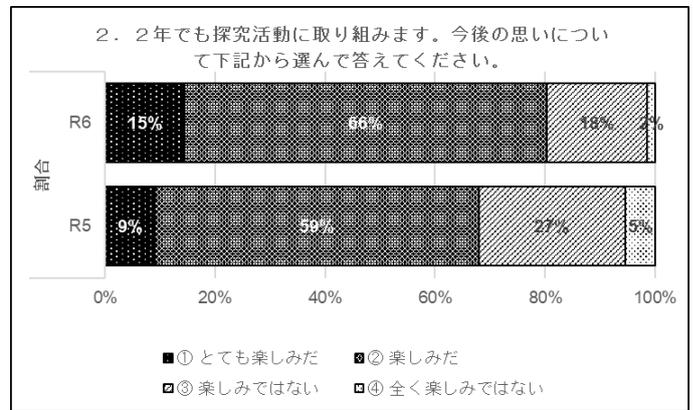
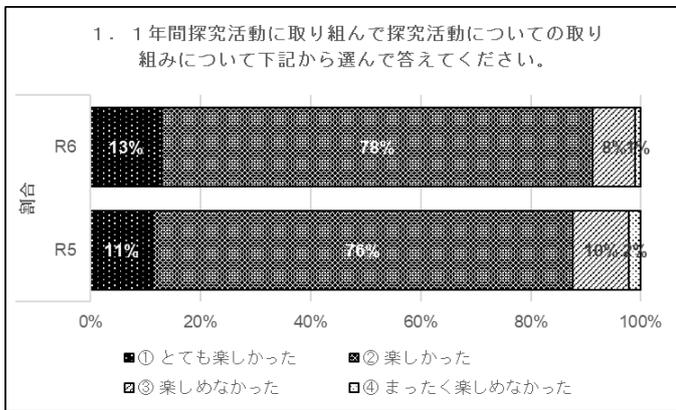
本年度は、昨年度からの継続を見越したプログラムのもとで指導を行い、同じ条件のもと振り返りと分析を実施した。その結果、満足度や理解度の向上が見られ、意欲の面でも変化が確認された。

また、探究心の根幹に関わる「論理的に考えること」や「知らないことを知ること」に対して、昨年に引き続き、生徒の反応が楽しさを感じる層と、そうではない層に二分化される傾向が明らかとなり、本校入学生徒の特色であることが確認できた。

一方で、「仮説を立てる」といった探究スキルに関しては、意欲の高まりとともに向上が見られ、今後の成長が期待される。

ただし、スキルの必要性については理解が進んでいるものの、実際の活用には至っていないことも分かり、今後の課題として認識された。

これらの結果を踏まえ、次年度以降の取り組みに生かしていきたい。



(2) 第2学年「探究Ⅱ」

○年間計画

月	日	内容(2時間連続)	学校行事	留意事項
4	10	オリエンテーション		I学期中間考査まで ○ テーマ設定 ・ 基礎となる情報収集 ・ 先行事例探し ・ 担当教員との面談
	17	ブレ探究	面談週間 短縮45分時程	
	24	問いを生み出そう		
5	1	吉野さん		
	8	問いを立てよう		
	22	問いを立てよう		
	29	探究テーマ報告 締切		
6	5	担当別探究開始	短縮45分時程 6限後全校清掃	夏休みまで ○ 個人研究の積み上げ ・ 基礎となる情報収集 ・ 資料の提示 ・ フィールドワーク ・ 担当教員との面談
	12	基礎研究		
	19	基礎研究		
	26	基礎研究		
7	10		※ 考査後、午前のみ	夏休み中に ○ 中間発表準備(夏休みの宿題) ・ フィールドワーク ・ アンケート ・ スライド作成
	17		※ 考査後、午前のみ	
夏休み				
9	4	準備・中間発表		中間発表 計9分(1人5分+感想4分) ※ 発表者1人につき、1人は質問する。
	11	中間発表	文化発表会前日(準備で消える説)	
	18	中間発表・以降の見通し		
	25	個人研究	短縮45分時程 進路探究week	
10	2			発表会まで(12月) ○ 発表会に向けた準備 ・ 個人研究 ・ 中間発表を振り返って ・ フィールドワーク ・ アンケート調査 ・ 外部講師による講演
	9			
	16	中間考査 2日目		
	23			
11	30			
	6			
	13			
	20	修学旅行 3日目		
12	27			
	4	期末考査 1日目		
	11		※ 考査後、午前のみ	
	18		※ 考査後、午前のみ	
1	21	↓ 発表会 当日	甲南大学 リサーチフェスタ?	
	15	個人研究・記録集用原稿作成		発表会まで(3月) ○ 発表会に向けた準備 ・ 個人研究 ・ フィールドワーク ・ アンケート調査
	22			
	29			
30		(木)地域課題から世界を考える日		
2	5		校内長距離走大会	～ 発表会のルール ～ 中間(9月)・地域課題・知の探究 → 全員全部
	8		(土)探究発表会?	
	12			
	19			
3	26			
	5			
3	7	↓ 発表会 当日	(金)「知の探究」発表会	

○探究Ⅱ活動報告

2年1組担任 牛尾 太郎

探究Ⅱの活動では、昨年の探究Ⅰでハンドブック「一生使える探究のコツ」やグループでのSDGsに関する探究を通して学んだ探究の一連の流れを踏まえて、個人探究に取り組んだ。各個人の興味のあることや疑問に思っていることなどについて探究テーマを定め、自分なりの方向性をもって仮説を設定、検証し結果が出ればまた新たな仮説を立ててさらに深めていくという活動を行った。

また、校内外での発表を通して、自分の取り組みをまとめること、他者に伝わるようにアウトプットすること、質問に答えること、他者からの助言をもらうこと、他者の発表を聞いて質問を考えることなど多様な経験を積むことができた。

(1) 学習内容

4月10日 17日 24日

1年次の探究の振り返り（アウトラインの作成や問の設定方法、情報収集の方法など）

5月1日

鳥取大学吉野和泰さんによる講義「妄想だって研究だ！～都市デザイン研究の最前線から～」

5月～6月初旬

問・仮説の設定/情報収集

6月中旬～7月

情報収集/調査方法の検討/調査・検証 夏休みの計画

夏休み フィールドワーク・アンケート・中間発表準備

9月4日 18日 25日 中間発表

ABの2グループに分かれ、各グループで1人5分程度の発表 google スライドを使用

発表を聞いたグループの生徒、担当教員全員から google フォームを通してアドバイスなどをもらう

10月～12月

情報収集/アンケート/調査/検証

外部発表に向けたポスター制作

10月23日

京都大学学びコーディネーター事業 佐野寛明さんによる出前授業

「物事が「わかる」とはどういうことか」

12月22日

東京学芸大学高校探究プロジェクト

「探究の共創 in Winter 2024」4名参加

1月～2月

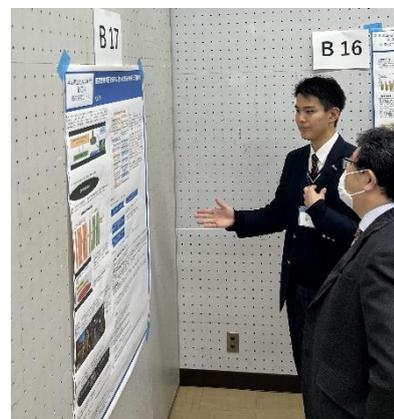
まとめの作成（スライド・文章）

発表準備（ポスター発表・スライド発表）

1月30日 「地域課題から世界を考える日」

2月8日 兵庫県高等学校探究活動研究会 2名参加

3月6日 知の探究コース発表会



(2) 各時間の生徒の振り返りより

〈問の設定にあたっての振り返りより〉

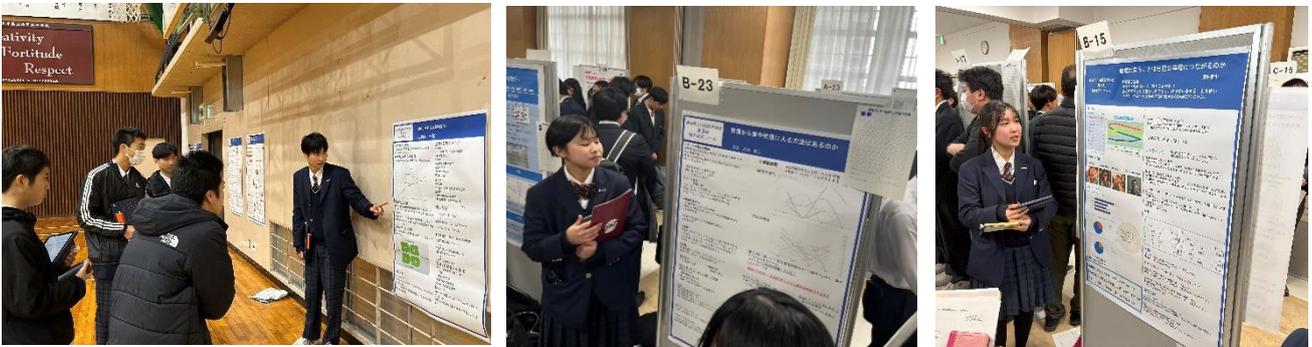
- ・ 問いを見つけることや、自分の関心のあるものへの情報集めが難しい
- ・ 自分がしたいことは何なのかを悩んだ
- ・ どんなことを疑問に思っているのか、知りたいことは何なのか

〈情報収集、調査、検証にあたっての振り返りより〉

- ・ どうすれば対照実験にできるか考えた
- ・ 明確な数値を出すためにどうやってその値を出すか悩んだ
- ・ 問いをどうすれば良いのか分からなくなった
- ・ 比較するための情報を収集する
- ・ 問いに対する答えにたどり着いた後はどうするか
- ・ アンケートをとるならどうやってとるのか、実験をどうやってするのか、見通しを立てた
- ・ 自分で理解した内容をより噛み砕いて分かりやすくしていきたい

〈まとめ（ポスター、スライド作成）にあたっての振り返りより〉

- ・ 専門的な用語を誰にでも伝わるように説明を考えることに苦労した
- ・ どのような手順で内容を書いておくか考えた
- ・ 結局自分が何をしたいのかを悩んだ
- ・ データが思っていたのと違う結果になったので追加で調査するべきか悩んだ
- ・ 探究してきた内容をうまく文章化していくのに苦労した。
- ・ もう一度アンケート結果を分析した



(3) まとめ

2年間の探究活動を通して「新たなことを自分の力で知る」体験を得ることができたのではないかと感じる。普段は知識や情報を受け取る側であることが多い中で、探究の時間においては知りたいことを定め、仮説を立て、時には他者の力を借りながら情報収集および検証を行い、結果を他者に理解してもらえようようにまとめて伝える、といった一連の作業を自力でやり通すことができた。自分が何かを知るための具体的な動き方や考え方を実践できたことを今後の学びにつなげてもらいたい。

2年間生徒らの活動を見守りつつ、適切な助言や声掛けでご指導いただきました担当の先生方や関係の方々に感謝申し上げます。

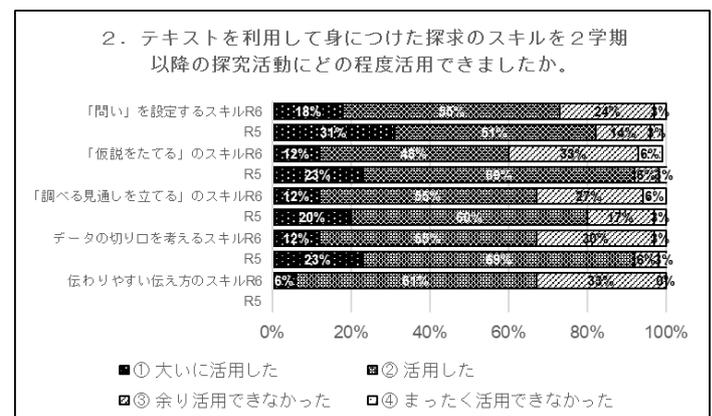
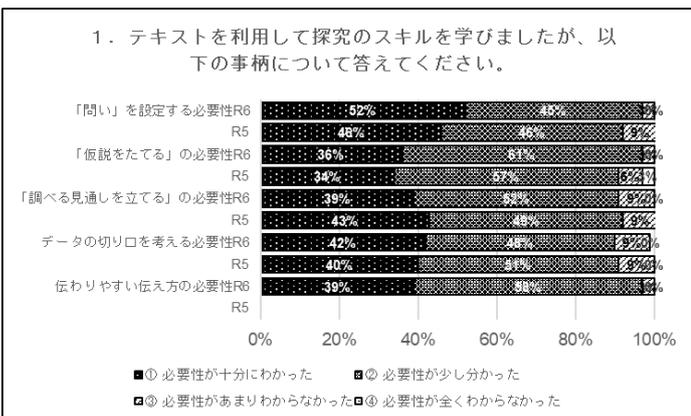
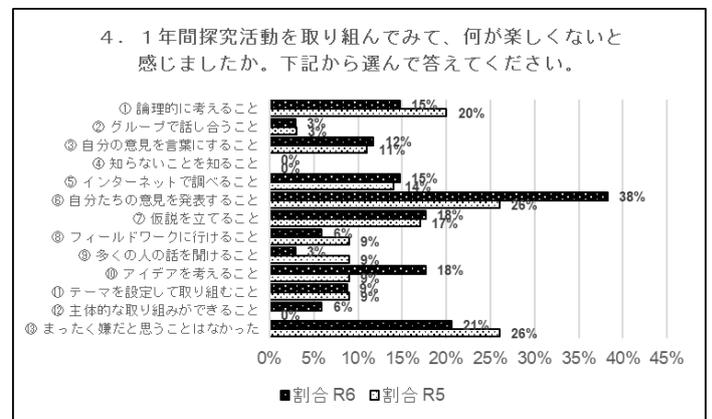
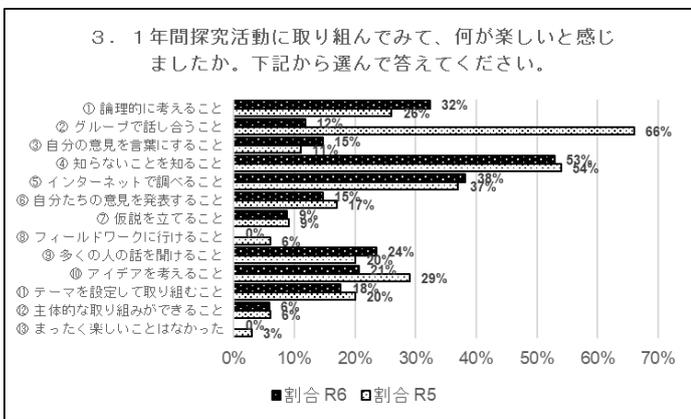
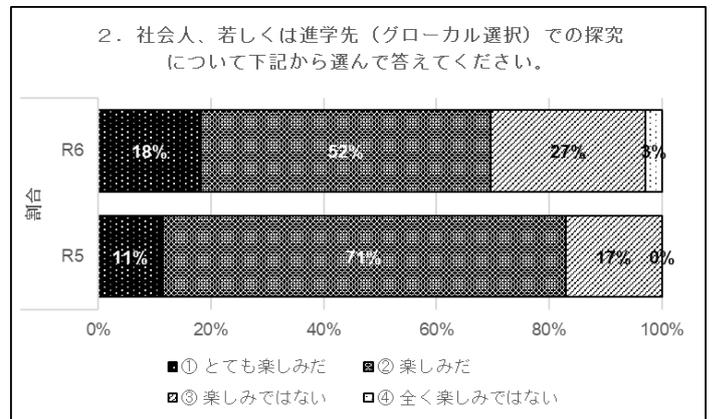
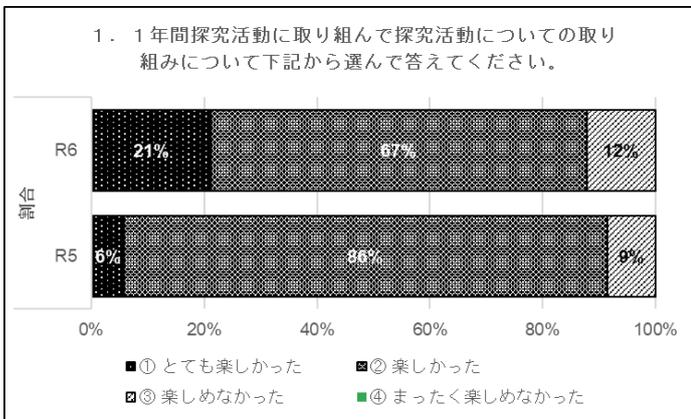
○令和6年度「探究Ⅱ」1年間の振り返り結果

令和5年度の1年次に実施したアンケート結果と、本年度（2年次）に実施したアンケート結果を比較したところ、2年次の探究活動は満足度が高いものとなったことが明らかになった。

スキルの定着を実感する生徒が増えた一方で、それを十分に活用できていない生徒も多いことが判明した。しかし、「論理的に考えること」や「多くの人の話を聞くこと」を楽しいと感じる生徒が1年次より増加しており、主体的な学びの基盤が築かれつつあると考えられる。ただし、一方で探究的な学びへの理解度が低い生徒も一定数存在することが分かった。

また、1年次はグループ研究、2年次は個人研究という形態の違いがあったため、「グループで話し合うこと」に対する満足度が大幅に低下する結果となった。

これらの結果を踏まえ、次年度以降は主体的な学びをさらに促進するとともに、探究活動の活性化に向けての工夫を取り入れた取り組みを進めていきたい。



(3) 第2学年「丹BALⅡ」

○年間計画

日程	内容	備考
4月11日(木)	オリエンテーション	昨年度の振り返り & 今年度の計画、聴講アンケート
4月18日(木)	調べ学習	聴講希望分野について調査
4月25日(木)	外部講師による講義	各分野別講義を2種類聴講、Let's Try①
5月2日(木)	聴講内容まとめ & 考察	聴講内容をまとめて考察する中で探究分野希望調査
5月9日(木)	グループ活動(テーマ①)	グループでLet's Try!④の実施
5月23日(木)	グループ活動(テーマ②)	グループでLet's Try!④の実施
5月30日(木)	グループ活動(研究計画①)	別紙計画書を作成
6月6日(木)	グループ活動(研究計画②)	別紙計画書を作成
6月20日(木)	グループ活動(情報収集①)	フィールドワークやアンケート調査等
6月27日(木)	グループ活動(情報収集②)	フィールドワークやアンケート調査等
7月〇日		
9月5日(木)	グループ活動(まとめ)	中間発表準備
9月19日(木)	グループ活動(中間発表)	分野別講師に来校いただき発表を聞いてもらう
9月26日(木)	グループ活動(研究計画①)	発表から得た問題点を洗い出し、研究計画の再考
10月3日(木)	グループ活動(研究計画②)	発表から得た問題点を洗い出し、研究計画の再考
10月10日(木)	グループ活動(情報収集①)	フィールドワークやアンケート調査等
10月17日(木)	グループ活動(情報収集②)	フィールドワークやアンケート調査等
10月31日(木)	グループ活動(情報分析・考察①)	Let's Try⑥
11月7日(木)	グループ活動(情報分析・考察②)	Let's Try⑥
11月14日(木)	グループ活動(発表準備①)	googleslideにて作成
11月28日(木)	グループ活動(発表準備②)	
12月12日(木)	グループ活動(発表準備③)	
1月9日(木)	グループ活動(発表準備④)	googledocumentにてまとめも作成開始可
1月16日(木)	グループ活動(発表準備⑤)	googledocumentにてまとめも作成開始可
1月23日(木)	グループ活動(発表準備⑥)	googledocumentにてまとめも作成開始可
1月30日(木)	地域課題から世界を考える日	
2月6日(木)	グループ活動(記録集原稿)	googledocumentにて作成
2月13日(木)	グループ活動(記録集原稿)	googledocumentにて作成
<p>テキスト「一生使える探究のコツ」入門編を何度も復習しながら、探究活動を進めていきます。 Let's Tryはテキストのワークシートです。 あくまでも予定ですので、行事等により変更をする場合があります。</p>		

○丹 BAL II（第2学年2～5組） 活動報告

2年3組担任 斎藤 源太

一般クラスでは、1月に実施する「地域課題から世界を考える日」での発表に向け、テーマごとにグループに分かれて探究活動を行った。探究を進めていく過程では、【課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現】というプロセスを繰り返すことで、ものごとへの理解や考えを深めながら、自分なりの答えを見つけることを目指した。

課題の設定

丹波市を中心に、農業や食、地域おこし、福祉などの分野で活躍されている方々の講義を受け、その講義の中で気になったこと、疑問に感じたことから探究の問いを決めた。問いを決めるのに苦戦したグループが多かったが、講義のテーマと5W2Hを掛け合わせてみたり、時間・空間・立場軸を変えてみたりすることで、問いが磨かれていったように感じる。

情報の収集

最初に自分たちが立てた問いについて仮説を立て、まずは自分の頭で考えることを大切にした。また、確かな情報を手に入れるために、何の情報をどのような方法で調べるのか、計画を立てて行った。情報収集には様々な方法があるが、ネットやテレビの情報から収集するだけではなく、フィールドワークを試みたり、実際に観察・実験、アンケートを行ってみたりして、オリジナルな情報を手に入れたグループも多かった。

整理・分析

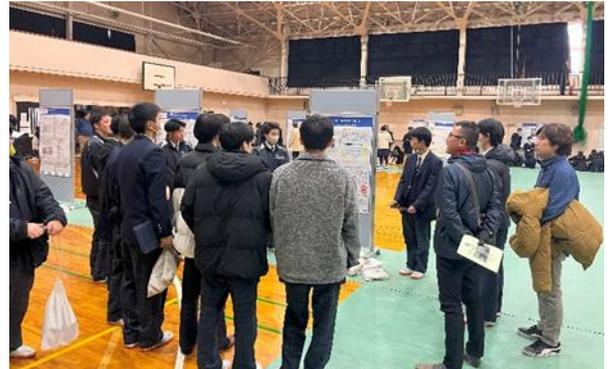
問いに対する自分なりの答えと根拠は何なのか、その答えと根拠は説得力があるものになっているかを意識しながら行った。数多くの情報を選択し、分かりやすくまとめることに難しさを感じていたように思う。

まとめ・表現

9月に中間発表を行い、それをブラッシュアップしたものを、「地域課題から世界を考える日」で発表した。当日はポスターセッション形式で発表し、活発な意見交換が行われた。発信することよりも、相手の心を動かすことを目的に、各グループが「より伝わりやすい伝え方」を模索し、発表に臨んでいた。



地域課題から世界を考える日の様子①



地域課題から世界を考える日の様子②

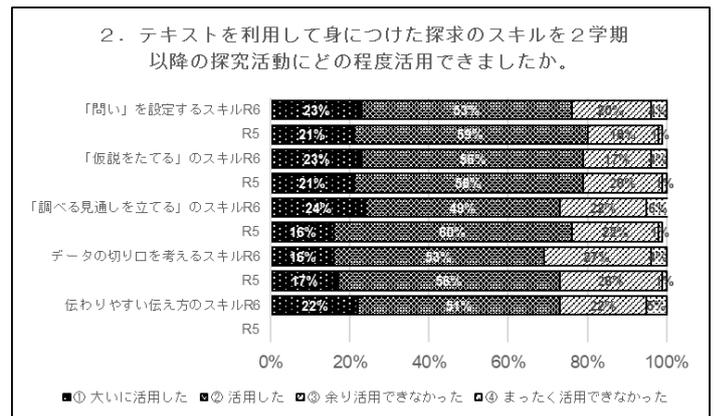
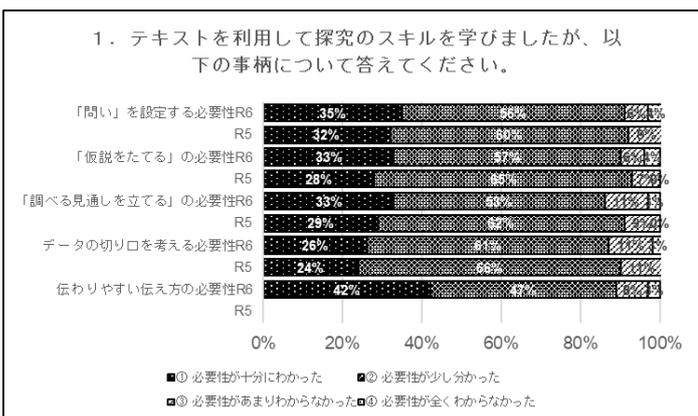
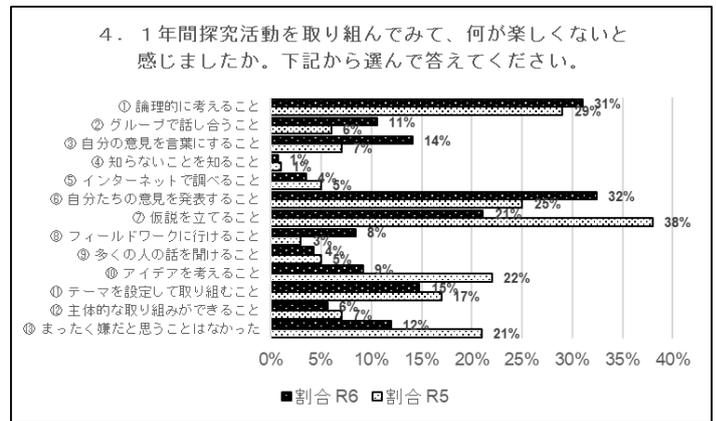
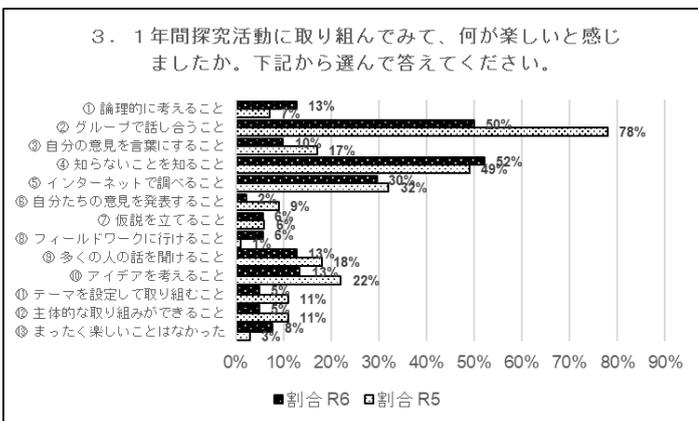
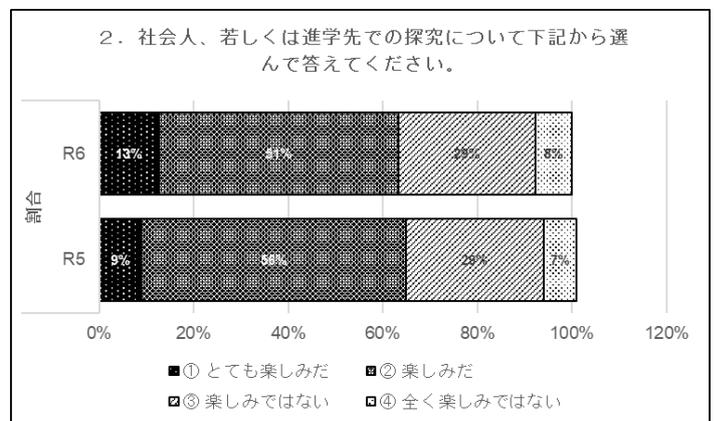
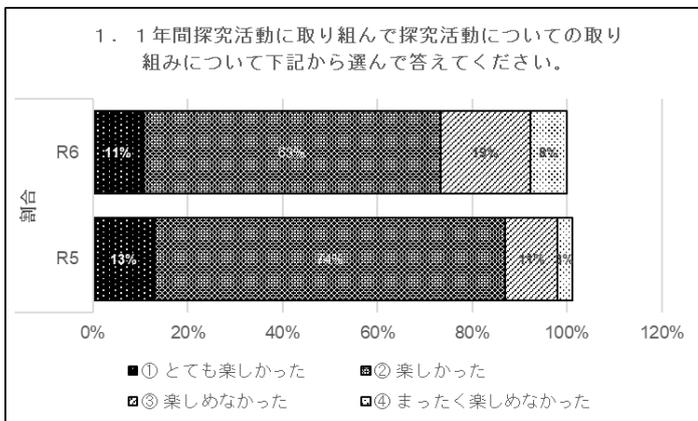
探究活動に正解はない。どれだけ内容を掘り下げてもゴールが見えないため、多くの生徒が焦りと戸惑いを感じているように見受けられた。しかしその中で、問題を新しい視点で考えたり、さまざまな角度から考えるようになったりして、より柔軟に物事を捉えるようになったと感じる。

○令和6年度「丹BAL II」1年間の振り返り結果

令和5年度の1年次に実施したアンケート結果と、本年度2年次に実施したアンケート結果を比較したところ、スキルの定着を実感する生徒が増えた一方で、主体的な学習を苦手と感じる生徒が多いことが明らかになった。特に「グループで話し合うこと」の満足度が昨年度と比較して大幅に低下しており、その要因として、1年次の調べ学習では良好な関係のもとで取り組んでいたものの、2年次に入り、より主体的かつ論理的なアプローチが求められたことで、グループによってはうまく機能しなかった班が一定数あったことが考えられる。

また、「論理的に考えること」や「知らないことを知ること」への意識において、生徒間で探究心の二極化が進み、学びを楽しめる生徒とそうでない生徒の差が顕著になっていることが分かった。

さらに、スキルの活用については理解の深化が見られるものの、依然として主体的な学びに十分に組み立てていない可能性が示唆された。これらの結果を踏まえ、次年度以降は、主体的な学びを促進するとともに、グループ活動の円滑化を図るための工夫を取り入れた取り組みを進めていきたい。



(4) 第3学年「丹BALⅢ」

○年間計画

日程	学習内容	留意事項
4 / 15 月	オリエンテーション 他己紹介取材	クラス単位でペアリング作成 ペアの相手の紹介をするための情報収集&紹介原稿作成
4 / 22 月	他己紹介発表①	各クラス毎に他己紹介の発表をしていく
5 / 13 月	他己紹介発表②	各クラス毎に他己紹介の発表をしていく
5 / 20 月	自己紹介文作成	他人からの評価を踏まえて自己紹介文の作成
5 / 27 月	面接試験について	資料の調べ方・受験報告の見方・所作等の基本事項
6 / 3 月	面接実戦練習準備①	自分の進路希望先の情報収集
6 / 10 月	面接実戦練習準備②	メンバーの希望進路の調査&希望先情報収集
6 / 17 月	面接実戦練習準備③	メンバーの模擬面接官質問用紙の作成
6 / 24 月	面接実戦練習準備④	自分の進路先面接ノートの制作(志望動機作成)
9 / 9 月	模擬面接練習①	面接練習及び問題点の洗い出し
9 / 30 月	模擬面接練習②	面接練習及び問題点の洗い出し
10 / 7 月	小論文講座①	表記、構成など基礎事項のふりかえり 小論文模試過去問トライ
10 / 21 月	小論文講座②	小論文模試本番調べ
10 / 28 月	小論文講座③	小論文模試本番
11 / 11 月	面接・小論文・志望動機特別講座	講師の話をよく聞いて今後の活動につなげる
11 / 18 月	小論文講座④	模試成績返却・解説動画
11 / 25 月	まとめ	ポートフォリオの形式でまとめる
12 / 2 月	まとめ	ポートフォリオの形式でまとめる

○3年間の総合的な探究の時間を終えて

第3学年主任 一原 直之

1年次では、探究活動の基礎基本を習得することを意識した活動を行った。1学期は全員が「スタンディングデスク」について探究を行った。情報収集から問立て、発表を実際に体験し2学期へとつなげた。2学期では丹波市役所と連携し地域課題（公共交通、環境教育、健康管理、化石資源、生物多様性、高校改革、国際比較）についてクラスの垣根を超えた少人数のグループでの探究活動を行い、スライド発表までにつなげた。しかしながら、問題解決につなげることはできなかった。

2年次では、1年次の経験を活かし、自分の興味のあることや将来したいことに繋がるようなテーマ（SDGs、人文科学、社会科学、自然科学、地域科学、修学旅行、その他）を設定し探究活動を行った。校外でのアンケートやフィールドワーク、情報分析などをし、スライド発表へとつなげた。また、ポスター作製を行い学年としてのまとめの冊子を作った。

3年次の活動は進路決定に向けた面接・小論文練習がメインであった。1学期は他己紹介から始まり、生徒たち自らで面接官や被面接者となり行う模擬面接へとつなげた。他己紹介の目的は、人に紹介してもらうことにより、自分では気づいていなかった自分の長所を発見し、自分のアピールポイントの発見につながるようにすることであった。続いて自己紹介文作成へと移った。他己紹介を通じて新たに知ることが出来た自分の特徴について再度まとめることで面接練習につなげることが目的である。面接を意識した文章の作成や書き方、表現の仕方などの確認も行った。また、模擬面接をにらみ、各自の進路希望先の情報収集し面接ノートを完成させたり、面接官としての質問を考えたりした。その後実際に模擬面接を行うことで2学期以降の大学入試面接試験に備えた。

2学期は主に小論文の練習がメインであった。表記・構成など基礎事項の確認をし、小論文の過去問において構成メモまで作成した。この経験を活かし、2回分を使い、小論文模試を行った。そして、模試成績返却を受け、出題のねらい、考え方のポイント、論述のポイント、解答例文を読みリピート上達シートを完成させた。このようにして、小論文試験に備えた。

1・2年の探究活動では一通りの知識・技能を得られたと感じる。ただ、調べ学習の域を超えていない物もたくさんあり、この数を減らすことが本校の課題であると感じる。定期的な助言は、状況を変化させるのに必要不可欠なものであると考えるので、各グループを専門機関へとつなげることは現状打破の一つの方法かもしれない。また、自分の興味のあるテーマを探究することが将来につながるのではないかと感じる。その活動が基礎となり自分を探究することにつながるのではないかと考える。

(5)第3学年「グローバル」

○年間計画

一般コース(選択人数:34)	
1学期	<ul style="list-style-type: none"> ・探究について 調べ学習と探究活動の違い ・テーマ決め ・研究計画書の作成・フィールドワーク計画 ・パワーポイント作成 ・中間発表会
2学期	<ul style="list-style-type: none"> ・調査分析 ・まとめ・発表練習会 ・探究活動発表会
3学期	論文作成

○【グローバル】学校設定科目(文系選択科目)

授業担当者 和田 好史

中学校の学習指導要領の総合学習の目標には「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく」とある。これに対し、高校の総合的な探究の時間の学習指導要領には「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していく」とあり、生徒自身と課題の位置づけが変化していることがわかる。高校ではさらに「自分の在り方生き方と一体的で切り離せない課題を生徒が自分で発見し、解決していく」ための資質・能力を育成することを目指している。つまり、「探究的」が「探究」になることで、生徒自身で探究の過程を進めることができるようになることが求められていると読み取れ、教員は生徒らに対して3年間で、課題の設定だけでなく、探究の過程の高度化と自律的に行えるようにする学びを提供しなければならない。

しかし、本校生の実態は、視野を広げる態勢が醸成されておらず、大人の指示を待っていることが多い。与えられたことに対しても遂行することが精いっぱい、その先や込められた意図に想いを寄せる時間がないように感じる。社会においても「探究」や「SDGs」という言葉がよく使われるようになり、「探究」が魅力的なものであるとされ、「SDGs」や地域とつながることで社会参画できる高校生がよいとされる風潮があるように感じるが、それらの意義が生徒らにとって腹落ちしていないままではないだろうか。

このグローバルの授業は3年生での選択科目であり、今年度選択者は一般コースの34名であった。上述した実態を踏まえ、生徒ら自身で探究の過程を進めることができるようにするため、担当教員4名は生徒それぞれの伴走者であろうとした。指導するにあたっては、単なる知識の教え込みではなく、対話の時間を多くとって生徒らの本音の部分を引き出し、生徒ら自身の想いで探究の過程が行き来させるような心がけた。実際の指導においては探究活動の一連の過程を、生徒個人の興味関心のある題材で経験させていきたいという思いから、テーマ設定の段階に時間を多くかけた。テーマが決まってからも、情報の収集や整理・分析、表現の各段階を行き来していく中でも毎時間、各自の進捗状況を確認していきながら、生徒らの課題意識や目標やストーリーを精緻化していった。「必要な時には助けるから何でも自由にしてよい」という「放任・放置」という立場ではなく、思考や行動を客観的に把握できるような視点を与えるような指導が必要であると感じた。生徒が過程を行き来する様々な場面で内面的に振り返り、探究の質を高めていけるよう、「その内容や手法は自分自身が腹落ちするものか、身近な人は納得してくれるのか」を問うようにした。

2か月に1度の進捗状況発表会を設定し、発表や質疑のスキルを確認しながら、必要に応じて指導を行っていった。発表を通して生徒らは自ら設定したテーマに対する学びを共有し、自分の内にあることを他者に伝えることの難しさとともに、共創の場のよさを感じたようである。

1月に最後の研究集大成発表会を行った。担当者4人で全グループの1年間の研究成果を確認した。どのグループも試行錯誤し、時には行き詰って方向転換しながら高校生らしい視点で自らの課題とその解決策について提案できた。これで授業は終わりではあるがさらに今後自身で自主的にテーマを深めるためのヒントを各グループに与えて発表会は終了した。

この課題研究活動を通して、「他者と協働して学ぶ態度」を身につけ、それを高校卒業後に社会で対面するであろう「答えのない問題」に対する解決策の模索をする過程での一助としてくれることを期待している。

3. 第9回地域課題から世界を考える日

目的：日頃の探究活動の成果を発表し、各学年の活動を全校で共有する。

本校の探究活動の内容を全国に発信する。

日時：2025年1月30日（木）8:30～12:35（朝読なし）

場所：兵庫県立柏原高等学校 2号館3階および北体育館

ねらい

今年度の「総合的な探究の時間」における学習成果の発表の場を設定することにより、他者からの批評・助言による相互の省察の濃い会を設け、取り組みへの意義を深化させ、探究活動における学びの質的向上、並びに基礎学力向上をめざし協働して学ぶ生徒の主体的な態度を育成する基盤を協創する。

時程表

	1年生		2年生
8:20	各HR教室で着席、点呼	8:20	北体育館に集合、点呼
8:30	開会挨拶（GoogleMeetで）	8:30	開会挨拶（GoogleMeetで）
8:40	発表準備	8:40	発表準備
第1部 今年の探究の成果をプレゼンし、意見をもらおう			
8:50	発表開始 1班から順番に ・1班につき8分 (発表5分 質疑応答3分) 10:18終了予定 北体育館へ移動、トイレ休憩 第2部発表者は北体育館舞台前へ	8:50	発表開始 ワールドカフェ方式 ・1班につき10分 (発表7分 質疑応答3分) 10:20終了予定 トイレ休憩、着席 第2部発表者は北体育館舞台前へ
第2部 地域課題から世界を考える全体発表			
10:35	代表発表開始 ・1年生 1年生代表 2班×8分(発表5分 質疑応答3分) ・丹BALⅡ 2-2～5 6班×10分(発表7分 質疑応答3分) ・探究Ⅱ 2-1 2人×10分(発表7分 質疑応答3分) ・グローバル 3年生代表者 1名×10分(発表7分 質疑応答3分) 12:21終了予定		
12:25	講評 高畑由起夫 様（関西学院大学名誉教授）		
12:35	閉会挨拶・諸連絡		

【第1部（第1学年）】HR教室でスライド発表



【第1部（第2学年）】北体育館でポスター発表



【第2部（全学年）】北体育館でスライド発表



3. 第2回知の探究発表会

目的 「知の探究コース」の2年生による2年間の探究活動の成果を発表するとともに、その発表を「地域科学探究科」の1年生が見学することにより、次年度の探究に対する目標とする。
本校の探究活動の内容を全国及び世界に発信する。

参加者：75名（1年1組 40名、2年1組35名）

日時： 2025年3月6日（木）8:30～12:40

場所： 丹波の森公苑（現地集合）

時間： 第1部 ポスター発表 8:45 ～ 9:25
第2部 ステージ発表 9:40 ～ 11:00
第3部 講評・基調講演 11:10 ～ 12:20

講評

高畑由起夫（関西学院大学 名誉教授）

杉岡秀紀（福知山公立大学 准教授）

中瀬 勲（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）

藤江康彦（東京大学大学院教育学研究科 教授）

足立 環（丹波市観光協会 会長）

尾松正章（丹波市教育委員会学校教育課 副課長）

永野祐一郎（兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事）

～ 時程 ～

8:30 丹波の森公苑本館集合完了

開会式（簡易）

8:35 2-1 ポスター貼り準備 1-1 本館に残り Wi-Fi 設定等

8:45 ～ 9:25 第1部 ポスター発表

☆ 1人 10分（5分程度発表、残り時間質疑応答）

9:35 ～ 9:40 開会式

9:40 ～ 11:00 ステージ発表【ライブ配信】

☆ 1人 10分（5分程度発表、残り時間質疑応答）

～ トイレ休憩 ～

11:10 ～ 12:20 講演 藤江康彦 氏

東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教職開発コース教授

12:20 ～ 閉会式



〔開会式〕



〔第1部 ポスター発表〕



〔第1部 ポスター発表〕



〔第2部 ステージ発表〕



〔第3部 講演（東京大学大学院教授 藤江康彦氏）〕

※当日は、県立尼崎高等学校の教育と
 絆コースの生徒40名をはじめ、地
 元の中学校の先生方などに来場いた
 だき、発表会を実施できた。

4. 発表成果例

(1) 生徒探究テーマ一覧

1年〔丹BALI &総合的な探究の時間I〕

1班	世界から学ぶ食品ロス
2班	丹波市における節水の必要性とその方法
3班	くらしの工夫を節電しよう
4班	今までより効率の良い節電をしたら、節電が普及するのではないかな
5班	環境にやさしいゴミの処理方法って何だろう？
6班	サステナブルファッションは私たちにとっていいもの？
7班	脱炭素型製品の力
8班	脱炭素製品が普及することで得られる効果はなんだろう？
9班	根本的な解決につながる再生可能な発電方法はなんなのだろうか
10班	丹波市で車の使用頻度を減らすにはどうすれば良いかな？
11班	本当に食品ロスを減らすことは可能なのかな
12班	節水について
13班	節電はやるものじゃない、やらせるもんや
14班	電気がなくなると地球温暖化はおさまるのかな
15班	リサイクルは環境に良いのかな
16班	プラスチックリサイクルの重要性
17班	サステナブルファッションと世界の関わり
18班	サステナブルなファッションを
19班	脱炭素型商品についている脱炭素マークは本当に効果をもたらしているのかな？
20班	世界と日本の再生可能エネルギー
21班	日本の太陽光発電
22班	昔から日本で問題になっている食品ロスは減っていつているのかな
23班	節水を心がけよう
24班	学校でより多く節電する為には、どのような方法で取り組みれば良いのだろうか。
25班	くらしの工夫の節電と再生可能エネルギー
26班	暮らしの工夫で節電しよう
27班	ゴミを分別する種類は多いのになぜ日本のリサイクル率は低いのかな？
28班	サステナブルファッション
29班	脱炭素製品を広めよう
30班	エネルギーをみんなにそしてクリーンに
31班	人々がエコで健康的な移動手段を使うにはどうすればいいかな
32班	生ゴミの処理方法

33班	どうすれば食品ロスが減るか
34班	節水を心がけよう
35班	待機電力はどのような影響を与えているか
36班	どうすれば節電できる？
37班	節電により地球温暖化をなくしたい
38班	プラごみの行方
39班	日本と外国、地域でゴミの分別方法は変わるのか
40班	2030年までに脱炭素製品による二酸化炭素排出量を0にできるのか
41班	水素などの再生可能な二次エネルギーを使うことで一次エネルギーに加え、二酸化炭素は減るのか
42班	中国と日本の太陽光発電の違いは天候である
43班	フードロス
44班	食品ロスが多い中国と少ないオランダの違いは何？
45班	節水を心がけよう
46班	節水について
47班	どうすればストレスなく節電できるのか
48班	生ゴミを減らすにはどうすれば良いか
49班	サステナブルファッション
50班	企業における脱炭素を進めるにあたってのメリットとデメリットはなんだろうか
51班	再生可能エネルギーについて
52班	自動車について

2年〔探究Ⅱ〕

1	仮眠がもたらす効果
2	阪神タイガースを退団した外国人選手の傾向
3	AIは教員になり得るのか？
4	緊張から集中状態に入る方法はあるのか
5	Street Piano Innovation～ストリートピアノから学ぶ教育方法の提案～
6	メンタルの強さと経験について
7	新型コロナウイルスからフェイクニュースの対策を考える
8	ホラー映画でダイエット！？
9	陸上競技における補食の競技力的効果
10	数年後のプリキュアを予想する
11	Nゲージをよりリアルに制御するには
12	国家戦略特区を逆手に取った地域創生は可能か？

13	無理に笑うことは自身の幸福度につながるのか
14	香辛料の文化ー日本・韓国・中国における香辛料の役割はどのように異なるのかー
15	日本の暴力犯罪を減らすためには
16	株の買い方
17	殺処分の犬を減らすにはどうすればいいのか
18	理想のバッテリーになるために
19	スポーツと遺伝
20	ABS樹脂の黄変を落とす
21	旅行と長生き
22	持続可能な農業について
23	人間の適応～自覚のない緊張に着目して～
24	犬の食事～本当にドッグフードが適切なのか～
25	通学手段としてバス利用が合理的な場合、利用しない理由はどんなものがあるのか
26	丹波市の空き家を地域活性化に繋げる～ウェルビーイングから考える～
27	食卓の彩が及ぼす心理的影響、食事の満足度を上げる食彩環境の提案
28	知名度向上と地域活性化
29	週休3日制は可能か
30	残薬問題の解決にできること
31	あくびの擬音語は国によって違うのか
32	USBの広がりの変遷について
33	地球温暖化によって利益を得る国や企業はあるのか また、どの様なことが利益を生むのか
34	自分の競技力を向上させる

2年【丹BALⅡ】

1班	丹波市の移住者はなぜ移住し、何を求めてやってきたか何を求めてやってきたか
2班	丹波市を活性化させて少子高齢化をおさえる方法
3班	丹波市をスイーツで活性化
4班	地域おこし協力隊のしくみ～大学連携～
5班	丹波市の魅力
6班	丹波の特産品の課題
7班	栗農家の高齢化とこれから
8班	人口が減っても暮らしやすい町を作る
9班	自然環境が子供にもたらす影響
10班	幼稚園児の聴覚と視覚を最大限活かす遊びや方法
11班	将来、認知症への世間でのあり方はどう変化し、接するのか

12 班	障害の基準、個性との違い
13 班	先進国と発展途上国の障害者の対応の違い
14 班	どうしたら障がい者が能力を発揮できて健康的に働ける環境づくりができるのか
15 班	楽しみ町にするには
16 班	丹波市に移住してきた人から良い町だなと思ってもらうためにはどのような工夫をしたらよいか
17 班	空き家問題を通して地域活性化を図る
18 班	誰でも働きやすい環境づくり
19 班	障がい者とより共生していくにはどのような体制が必要か
20 班	なぜ日本のアニメは国境を超えて愛されるのか
21 班	戦争と飢餓
22 班	ヨーロッパの移民問題について調べよう
23 班	食品ロスを減らしたい
24 班	丹波市の食品ロスを減らすためには
25 班	孤食はどのようなことが原因で起こるのか
26 班	筋肉をつけるためには
27 班	昔と今では生態系がどのように変わっているのか
28 班	環境問題とレジ袋有料化の関係
29 班	農家人口は減っていいのか？
30 班	人との関わり
31 班	拡張現実「AR」とはどんなものか
32 班	AR 発展への道
33 班	一握りの投資家になるにはどうすれば良いのか
34 班	投資のメリット、デメリットについて
35 班	これからの世界の株はどうなるのか
36 班	自分の強みを知る
37 班	人口知能(AI)は人間をこえられるのか
38 班	未来で出てくる技術は？
39 班	人口が減っていく中でどんな街づくりをするか

2年生発表要旨（探究Ⅱ）

タイトル	メンタルの強さと経験について
要旨	メンタルの強さと経験の多さには関係があるのか、ストレスからの成長についての論文と心のゆとりについての論文から考察しました。また、ワンダーフォーゲル部員の協力のもと、登山中のしんどさについて実験を行い、経験の多い2年生と経験の少ない1年生で、しんどさに差が出るのかを調べ、その結果から考察が正しいのかを検証しました。
タイトル	日本の暴力犯罪を減らすためには
要旨	日本の暴力犯罪を減らすためにカリフォルニア州アーバイン市の防犯環境設計を参考にした。日本とアーバイン市の防犯環境設計が異なり、アーバイン市の暴力犯罪率がアメリカの中で異様に低く日本でも活用できるのではないかと考えた。日本人犯罪者の犯罪を諦めた理由と日本の恥の文化や犯罪心理から日本でも暴力犯罪を減らすことができるという結論になった。
タイトル	スポーツと遺伝
要旨	遺伝と環境で、どちらが運動能力に与える影響が大きいのか探究する。オリンピックなどスポーツの場面でアフリカ系の血が入っている人が活躍する場面が多いと感じたから。結論は運動能力の遺伝率は66%で残りの30%が環境が与える影響だとわかった。
タイトル	香辛料の文化ー日本・韓国・中国における香辛料の役割はどのように異なるのかー
要旨	日本・韓国・中国における香辛料の役割はどのように異なるのかについて探究しました。まず香辛料について知るために世界の香辛料の歴史と、代表的な香辛料であるトウガラシの消費量を調べ、そこから知った辛くない香辛料のパプリカパウダーについても調べました。3カ国の比較をそれぞれの香辛料の歴史と役割から共通点や相違点をまとめました。
タイトル	丹波市の空き家を地域活性化に繋げる～ウェルビーイングから考える～
要旨	地域活性化へつながる空き家対策を考えるため、年々増加している丹波市の空き家について調査した。同じ中山間地域の島根県がおこなっている体験施設を丹波市にも取り入れて、移住者増加に繋がると考えたが、人口減少の日本において、ある地域の人口が増えるということは、他の地域から人を奪っていると思い、地域活性化の定義をウェルビーイングから考えた。
タイトル	陸上競技における補食の競技力的効果
要旨	アスリートが練習前後に補食を摂取することにはどのような効果があるのだろうか。補食には、オリンピックで選手のサポート食として使用され、糖質もタンパク質も摂取できるおにぎりを使用した。部活後におにぎりを提供するグループと何も提供しないグループに分け、1ヶ月の身体組成と運動能力の変化を計測した。

タイトル	殺処分の犬を減らすにはどうすればいいのか
要旨	私の飼っている犬が保護犬で、保護犬について調べていると殺処分されている犬がいることを知り、人間の手によって殺されてしまう犬をなくすためにはどうすればいいのか柏原高校で実施したアンケートをもとに探究しました。私の予想していた結果と違う部分がたくさんあり、多くの学びがありました。ぜひ興味がある方は見にきてください！
タイトル	ABS樹脂の黄変を落とす
要旨	「プラスチックの黄ばみを身近にある洗剤を使って落とすにはどうするのが効率的か」について探究しました。ABS樹脂の黄変は、酸化防止剤によるフェノール黄変と難燃剤の劣化という二つの原因があることがわかりました。そこで、それらを同時に樹脂本体にダメージを与えないようにABS樹脂を漂白する方法について検証するための実験をおこないました。
タイトル	数年後のプリキュアを予想する
要旨	歴代プリキュアシリーズを比較して、読み取れたことから今後ありそうなプリキュアの予想図を作る。予想することは、モチーフ、人数、年齢、妖精、アイテム、主役のプリキュア。比較してみて使用頻度や間隔、最近の傾向を踏まえた上で予想する。
タイトル	持続可能な農業について
要旨	まず、はじめに日本の農業は、三つの大きな問題を抱えていることが分かった。①農家の減少 ②農家の高齢化 ③耕作放棄地の増加だ。これらの問題の原因は農家の収入が他の職業と比べて低いことだと考えた。そこで、丹波市の農家の所得を増やすために二つのプランを立てた。第一に特産品の有効活用をするプラン、第二に農地を集約化するプランを検証した。
タイトル	あくびの擬音語は国によって違うのか
要旨	まず、探究理由は、日頃あくびをすることが多くあくびについて気になったから。そして、あくびの擬音語に共通点があったら面白いなと思ったからです。次に、仮説は、国でよく聞く音によって違うということ、そして、言語に共通点があるものは、擬音語も似ているというものです。考察は、人によって擬音語の表し方は違う。そのため、あくびの擬音語は国によって違うのではなく、人によって違うと考えました。
タイトル	旅行と長生き
要旨	私は旅行が好きで旅行についての探究がしたいと思い、考えてみると旅行に行くことで何か自分にメリットがあるといいなと思ったので自分がこれからそうなったらいいなと思う「旅行に行くことで長生きすることはできるのか」という問いをたて探究を進めました。旅行に行くことで人が得られる効果を調べそれが長生きにつながるのかを考えて結果を出していきました。

タイトル	ホラー映画でダイエット！？
要旨	ホラー映画を見ることでカロリーを消費することができるが、それはなぜかということ を明らかにする。また、ホラー映画を見ることによってどのようなメリットが他に あるのかということについて深める。その健康効果のなかでエンドルフィンというも のについて説明する。また、最も多くカロリー消費できる映画TOP3について提示し た。
タイトル	株の買い方
要旨	NISAにはNISAで買った株と、そうでない株では損失を利益で相殺できないことがある と知った。NISAで買った株と、そうでない株を一緒に買う時にどのように買うと損を しにくく買うことができるか色々と条件を決めて調べると新NISAのみのもので以外で は、最高額と最低額の変化が大きいもの1つと残りは小さい物を一緒に買うと損をし にくくなると考えられた。しかし、この実験は現実的ではないので、次は現実的にも 考えたい。
タイトル	USBの広がりの変遷について
要旨	EUにて、充電ケーブルをUSB一種類にする法案が採択され、現在施行されている。USB が選ばれた理由を知りたいと思い、このテーマにした。
タイトル	新型コロナウイルスからフェイクニュースの対策を考える
要旨	新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、新型コロナウイルスのフェイクニュースもた くさん拡散されました。なぜ、さまざまなフェイクニュースがネット上に拡散されて しまったのか、それは誤情報と悪意のある情報が作用することで偽情報が生まれてし まっているのではないかと感じました。直感的にならず、さまざまな情報を集めるこ とが最も良いということが分かりました。
タイトル	阪神タイガースを退団した外国人選手の傾向
要旨	今回このテーマについて調べようと思った理由は、阪神タイガースの外国人の歴史は 聞いたことがあるけど、退団した選手の歴史は聞いたことがなかったからです。調査 方法としては、NPBのプロ野球在籍者名簿から「あ行」の外国人選手のみを選び、国 籍をインターネットで調べました。また、阪神と阪神以外で結果が大きく異なったの で「か行」の外国人選手についても同様のことを行いました。
タイトル	食卓の彩が及ぼす心理的影響、食事の満足度を上げる食彩環境の提案
要旨	食事色彩（食彩）や空間を取り巻く色彩（食彩環境）は人の心理に様々な影響を与え ることがわかっている。食前の影響を調べた先行研究から、食後の影響に興味を持ち 様々な要素から食後の影響を調べた。実験などの結果から食事の満足度を上げる食彩 環境を考察し、提案する。

タイトル	Nゲージをよりリアルに制御するには
要旨	メインテーマは、「NゲージにおけるATSの再現」を探究しました。列車の制御を再現するにあたって、複数の制御する仕組みを調べたり比較してNゲージで再現可能かを検討しました。ATSの再現をするために、どのような方法があるのか調べ、実際に制作してNゲージのサイズにシステムを落とし込めるかを検証しました。検証結果から、列車運行の安全確保やNゲージの進化の可能性について考察しました。
タイトル	週休3日制は可能か
要旨	休日と平日の日数の比率に疑問を持ったから探究することにした。調査方法は実際に週休3日制を導入している国や企業とその理由を調べる。調査からたくさんの導入事例とメリットがあるが日本ではあまり浸透していないことがわかった。その理由についても調べる。
タイトル	仮眠がもたらす効果
要旨	まずNASAの実験で仮眠をとったあと、人間の身体にどんな好影響を与えるのか示した。次に仮眠はどれくらい効果があるのか実際に行われた仮眠の実験の実例を用いて仮眠の効果を証明する。いずれの実験でも集中力が上がったり、作業の効率が上がったという結果になっていた。仮眠をとることによって、それに加えて自分で小さい実験を行った。また、その実験で出た、「仮眠をとったら余計に眠くなるのはなぜ」という疑問について考えた。
タイトル	残薬問題の解決にできること
要旨	薬に関する社会問題について探究しようと思い、残薬問題の飲み忘れについて探究しました。飲み忘れ防止には服薬時間になったらアラームなどでただ教えてくれる機械的な告知と声掛けなどのフィードバックも交えながら教えてくれるコミュニケーションによる告知ではどちらの方が効果があって推奨できるのかという問いを立てて探究を進めていきました。そして企業の実験などをもとに考察しました。
タイトル	通学手段としてバス利用が合理的な場合、利用しない理由はどんなものがあるのか
要旨	柏原高校の第二学年に対しクラスルームを用いてアンケートを行い、「現在路線バスを利用しているか」「過去に利用したことがあるか」そして「家からバス停まで歩いてかかる時間はどのくらいか」の3点を重点的に調査。「家からバス停までかかる時間が短く学校までの徒歩の時間が長い」場合は「バス利用が合理的である」とし、その場合に利用しない人の意見をまとめ、丹波市の通学におけるバス利用の課題点について調べた。
タイトル	Street Piano Innovation～ストリートピアノから学ぶ教育方法の提案～
要旨	ストリートピアノを設置するメリットについて施設に聞いた。仮説は、ストリートピアノに集う人達の間で学び合いが生まれる。結果、日本では形、モノとして見ている傾向が多い。海外では、交流が生まれている。交流を生み出すためには何が必要か。教育方法の違いからきているのではないかと考えた。ストリートピアノは自由に弾けるからこそ教育的に活かせる。

タイトル	緊張から集中状態に入る方法はあるのか
要旨	緊張を与えて2つのイメトレをし、集中しているかを実験で調べる。実験内容はダーツで、緊張を与えない場合・緊張を与えた場合・緊張を与えポジティブイメトレをした場合・緊張を与えネガティブイメトレをした場合の4セットを行う。結果、そもそも探究テーマが間違いで、緊張した時点で集中していることに気づいた。よって、正しいテーマは「緊張から集中を持続する方法はあるのか」になる。結論ネガティブイメトレをした時に持続できる
タイトル	知名度向上と地域活性化
要旨	丹波市の地域活性化を行うために、まず現在の丹波市の状況を整理してそこから問題点を見つけて地域活性化の方法を調べました。そこで丹波市では転入者や観光客の数があまり伸びておらず、また少子高齢化が進んでいるために過疎化が進んでいるとわかった。そこで、丹波市の知名度を調べると知名度は高くないとわかった。知名度の低さは移住や観光地の選択を考える上で影響があるので、丹波市の知名度が上昇するための案を二つ考えた。
タイトル	犬の食事～本当にドッグフードが適切なのか～
要旨	私の家には犬がいて、その犬はドッグフードの好き嫌が多いです。しかし、たまに人間が食べる味のつけていないお肉をあげるとよく食べてくれます。そこで、ご飯をあげているときに「犬の食事には本当にドッグフードが適しているのか」と疑問が浮かび、栄養や費用を市販のドッグフードとお肉で比較して調べました。
タイトル	人間の適応～自覚のない緊張に着目して～
要旨	人類史の大半が狩猟採集の生活であるため、身体は狩猟採集の生活に適応したことが考えられる。狩猟採集の生活に馴染んだ身体は、現代の環境で余分な緊張を抱えている可能性がある。科学技術の創り出した照明光を取り上げ、人工光に対する人の適応という観点から照明の生体への反応を見た。自然光下では生じない緊張が近代生活を送る体に生じているという仮説を立てた。仮説を裏付けるような結果は得られなかった。改善の余地あり。
タイトル	AIは教員になり得るのか？
要旨	AIは学校教員に適さないと仮定する。AIが教員になるメリットは、採点の自動化やデータ分析に基づく最適な学習提供などが挙げられる。デメリットは、コミュニケーション能力が欠けている、生徒の自律的思考力の低下などが挙げられる。よってAIは人間教育の役割を担えないため、学校教員として適していない。今後AIが学校とどのような関わりを持つようになるのか、学校教員が抱える問題に着目して探究を進めていった。
タイトル	理想のバッテリーになるために
要旨	自分の中での理想のバッテリーはコンスタントに強い打球を打てる選手で、そうなるためにまず、自分のフォームの改善に取り組んだ。自分が思う理想のフォームの前田智徳選手を参考にして、繰り返し動画を撮ったり、先生にもアドバイスをもらって、改善することができた。また、打球速度を上げるために、スイングスピードを上げることが重要だと分かった。引き続きどちらにも取り組んでいく。

タイトル	国家戦略特区を逆手に取った地域創生は可能か？
要旨	国家戦略特区は、審議の後に特定地区で規制緩和が実施できるというものであり、規制緩和を実施できる、という条件で企業や大学を誘致し、地域創生に協力してもらうことは可能か、ということがこの探究のテーマである。養父市などの例から短期間の連続設置や指定までの期間が非現実的であるほどではないことがわかり、これからはChat GPTを用いて作った例の現実性を明確化していきたい。
タイトル	無理に笑うことは自身の幸福度につながるのか
要旨	誰もが一度はしたことがあるであろう「作り笑い」。そのような「作り笑い」で人は「幸福」を感じることができるのか疑問に思い探究しました。作り笑いには4つの種類があります。探究する上で新しい疑問を持つようになり、その疑問に対して仮説を立てました。身近なことに焦点を当てた探究です。興味がある人はぜひ、聞きにきてください！
タイトル	地球温暖化によって利益を得る国や企業はあるのか また、どの様なことが利益を生むのか
要旨	日本では微量のメリットしかなくデメリットを上回ることにはなかった。他の国では特に北欧やロシア、カナダなどの寒さの厳しい国がメリットが大きいと分かった。利益を生む分野は多岐に渡り、地球温暖化を食い止めるものだけでなくそれに適応するために対策を打つ企業も儲かっていた。この分野はまだまだ巨大な潜在的な市場があると分かった。
タイトル	自分の競技力を向上させる
要旨	競技力を向上させるために、スタート時の前傾の歩数、ストライド、脚の動き、着地脚、区間タイムをプロ選手と比較する。自分の悪い点やプロ選手の良い点を比較から読み取る。そこから、自分の改善点やまだまだ向上できる点を意識して一週間の練習を組み立て1ヶ月間練習をする。そして、最後に競技場に400mの記録を計りに行き、目標達成。

2年生発表要旨（丹BALⅡ）

タイトル	空き家問題を通して地域活性化を図る
要旨	まず私達は丹波市の空き家問題の現状を知るために、タブレットで調べたり丹波市役所に電話をしました。空き家問題の現状では平成20年より前は増加傾向にありましたが、平成20年以降は減少傾向にあるということが分かりました。次にコーディネーターの鴻谷さんの紹介で、「一般社団法人みつおおじ」について調べることになりました。調べていくなかで、自分たちには何ができるかを探究していくようになりました。
タイトル	孤食はどのようなことが原因で起こるのか
要旨	私たちが探究している孤食は、今増えつつあり、特に高齢者の割合が高くなっている。私たちが明らかにしたいことは、孤食の問題点・孤食に陥ってしまう原因・孤食を解決する方法である。立てた仮説は二つで、一つ目は新型コロナウイルスの影響で、一人で食事をするが増えたこと。二つ目はスマートフォンの普及によって共食でのコミュニケーションの必要性がなくなったこと。
タイトル	楽しみ町にするには
要旨	楽しい町にするにはという探究テーマで深掘りしている。現在、丹波市の人口は減少しており、活気がある町とは言えない。丹波市を楽しい町にするには、人口を増やすことが大切だと考えた。若者が増えると活気があるまちに近づいていくと仮説を立てて若者が町に求めているものをアンケートやインターネットを活用して調べ、地域を活性化させるために何をすればいいか探究している。
タイトル	誰でも働きやすい環境づくり
要旨	自分たちは誰でも働きやすい環境について探究を行った。特に外国人の日本での働き方に着目した。日常生活で日本で働いている外国人を見かけることがあり、どの国の人たちが働いているのか、どのくらいの人か働いているのかなど気になることがたくさんあったのでこのテーマを軸に探究した。最初はうまくいかずテーマを変えることもあったがアンケートを取ったり、話を聞いたりしてうまく時間を活用して行うことができた。
タイトル	どうしたら障がい者が能力を發揮できて健康的に働ける環境づくりができるのか
要旨	障がい者について偏見を持たず理解することで、障がい者が能力を發揮でき健康的に働ける環境をつくることのできるという仮説を立て、日本の実雇用率が低い理由を知るために、各国の実雇用率や障がい者に対する取り組みについて調べ比較した。また、ハローワークの方に質問をし、健常者が当たり前でできることでも難しい場合や、安全面の配慮が必要になることが分かった。
タイトル	一握りの投資家になるにはどうすれば良いのか
要旨	このテーマにした動機は、今年度に柏原高校で講演していただいた岡崎健一さんの話を聞いて興味を持ったことや、これからの時代を生きていく中で投資は必要になってくると考えたからです。仮説は、投資家は年配の人たちが多くことから、まとまったお金が得られるまで長い期間がかかるのではないかと、AIを使用することで若いうちでも成功できるのではないかと、の2つです。主にインターネットを用いて調べ学習を進めました。

タイトル	将来、認知症への世間でのあり方はどう変化し、接するのか
要旨	認知症の方に対する今の活動と昔の活動の違い、認知症の種類、人数、進行度合い、認知症の方の一人暮らしの割合などを調べました。また、老人ホームを訪れて、実際に認知症の方と関わっている職員の方に話を伺いました。認知症の方と接するとき、目や言葉、身振り手振りを用いてコミュニケーションをとり、相手の人間性を知り、信頼関係を築くことが大切だと教えていただきました。
タイトル	自然環境が子供にもたらす影響
要旨	都会で子育てするか田舎でするか子供にどのような影響があるのかを調べた。子供の身体にはどんな影響があるのか、思考力や想像力で異なるところが出てくるのか、都会で育つのと田舎で育つのにどんな差があるのかなどいろんなことを調べ数値化されているものや大学の論文などから得た情報やデータを使って差や変化について結論を出す。
タイトル	人口知能(AI)は人間をこえられるのか
要旨	人工知能(AI)は、計算速度や特定分野での精度で人間を超える可能性を持つ一方、創造性や感情、倫理的判断といった側面では限界がある。医療診断や自動運転などで高い成果を上げているが、汎用AIの実現には数十年かかると予測される。今後、人間とAIが協力して社会問題を解決し、効率化や生活の質の向上を目指すことが重要である。特に倫理的ガイドラインの整備がAI発展のカギとなる。
タイトル	ヨーロッパの移民問題について調べよう
要旨	海外では移民の増加が社会にさまざまな影響を与えています。本発表では、移民が増えることで起こる仕事や生活の変化、文化の違いからくる問題、そして、各国やEUがどのように対応しているかを調べました。また、移民が社会に良い影響を与える面と、課題になっている面を比べ、どんな解決策があるかを考えます。私たちが調査したデータや事例も紹介しながら、移民問題についてまとめました。
タイトル	障害の基準、個性との違い
要旨	私たちは「障害の基準、個性との違い」というテーマで「障害は人の手が必要で、個性は人の手が必要でなく、基準は変化する」という仮説を立てて調べました。福井祐美子さんの話を聞き、昔はなかったメガネなどが開発されたことで障害だったことが障害でなくなることがあると知りました。そこで時代の変化により様々なものが開発されたり、バリアフリーな社会が作られていくことで障害は減るという考察を立てました。
タイトル	昔と今では生態系がどのように変わっているのか
要旨	今と昔の生態系の違いについて着目し、生態系ピラミッドの一番上に位置できた要因を主に調べた。大きな時間の変化がないと大きな違いは生まれず、わかりにくいため大まかに昔と今で分けてその中でも各々割り振られた場所について鮮明に細かく調べた。生態系の頂点に上り詰めたのには、種の進化やあるいは環境的要因も関係している。それらのことについてまとめたテーマ。

タイトル	先進国と発展途上国の障害者の対応の違い
要旨	私たちは、「先進国と発展途上国での障害者の対応の違いについて」と「外国の障害者の方への制度について」の二つのテーマを探究し、「先進国の方が障害者に対する取り組みが発展途上国よりも多い」と「国の人口の障害者の割合が高い国の方が障害者への制度や取り組みに工夫をしている」という仮説を立てて調べた。海外と日本の取り組みと制度について発表内容をまとめた。
タイトル	自分の強みを知る
要旨	自分の強みを見つける方法について調べました。このテーマについて、成功体験や自分の長所をもつことが強みを自覚することにつながるのではないかと、モチベーションが高いと成績が高くなるのではないかとという仮説を立てました。この仮説を検証するためにアンケートを実施し、その結果から年齢や性別、過去の体験との関係を分析しました。
タイトル	人との関わり
要旨	私たちは、「人と関わる上で一番大切なものは何か?」「人間関係の中で大切なものは何か?」について調べています。そこで私たちは、「関わる相手が変わることで、人と関わる上で1番大切なものが変わるのではないかと」という仮説を立てました。全校生徒にアンケートをとった結果、1番大切なことは「態度」「挨拶」「言葉遣い」という結果が出ました。
タイトル	戦争と飢餓
要旨	私達の探究内容は「戦争と飢餓」です。戦争は人命や社会基盤を破壊し、食料供給を断絶させて飢餓を引き起こすことがあります。戦争による経済的混乱や物流の停滞は、飢餓に大きな影響を与え、特に弱い立場の人々に深刻な影響を与えるので、戦争はなくならなくても、飢餓をどうやったらなくせるかをしっかりと考えました。
タイトル	丹波市をスイーツで活性化
要旨	私たちのテーマは「丹波市をスイーツで活性化」です。このテーマで考えた仮説は、丹波栗を使ったスイーツを増やすことで知名度が上がり、観光客が増えるのではないかとです。まず、丹波市の特産物について調べ、それらを使用したスイーツやスイーツ店などを調べました。分かったことは、丹波市には丹波栗などの特産物を使用したスイーツやスイーツ店が多く、観光客の人数も徐々に増えつつあることです。
タイトル	丹波市の食品ロスを減らすためには
要旨	丹波市の食品ロスを削減するために自分たちには何が出来るのだろうか考えました。まず食品ロスが日本で1番少ない長野県上田市で採用されているやり方を丹波市でも活用出来るのではと考えました。例えば生ゴミ出しません袋の無料配布、コンポストを利用した生ゴミの削減などがありました。私達はコンポストに焦点を当て、丹波市でもコンポストの利用を普及させることが大事だと考え、調べました。

タイトル	地域おこし協力隊のしくみ～大学連携～
要旨	私たちの班は大学連携で得られる効果を調べました。「大学との連携を通じて、学生が丹波市を訪れ、体験活動をするることにより、移住者が増えて活性化につながる。」という仮説を立てて取り組みました。調べた結果、移住者の数はあまり増えていませんでした。しかし人口が増えることだけが地域の活性化に繋がるのではなく、人口が減ることでも得られる効果もあると気づくことができました。
タイトル	栗農家の高齢化とこれから
要旨	私たちは『栗農家の高齢化とこれから』というテーマを立てた。丹波栗について調べている時に栗農家が高齢化している事を知り、現状と今後について調べようと思った。栗農家の数が減少し、栗の生産量も減少するという仮説を立てた。そして、それを明らかにするために栗農家の方にインタビューし現状や仕事内容などについて聞いた。そこから、なぜ高齢化しているのか、丹波栗のこれからについて考え、私たちに何が出来るかを考察した。
タイトル	投資のメリット、デメリットについて
要旨	私たちは投資について探究しています。仮説を立てるときについて個人のメリットについて目が行きがちですが、私たちはそれだけでなく社会全体、日本にとってのメリットにも目を向け、アメリカと日本の投資に対する意識の違いについても考え探究しました。誰もがすぐわかるメリットではなくあまり知られていない企業のメリットなども調べました。
タイトル	丹波の特産品の課題
要旨	私たちは丹波の特産品の課題について探究しました。私たちが調べた丹波の特産品は丹波栗、黒大豆枝豆の2つです。この探究テーマから分かった課題は4つあります。分かった課題は面積、農家の減少、農家の高齢化、鳥獣被害です。これらを調べた結果、面積、農家の人数は減少傾向にあることが分かりました。また、鳥獣被害は横ばいの傾向ということが分かりました。
タイトル	未来で出てくる技術は？
要旨	僕たちは、未来のことについて調べました。そこで1番興味深く感じたのは、リニアモーターカーで、僕たちはリニアモーターカーについて調べることにしました。リニアモーターカーは最高時速が500kmと言われていて、大阪から東京までの距離を約1時間で走り、新幹線の約2倍の速さということ、がわかりました。
タイトル	幼稚園児の聴覚と視覚を最大限活かす遊びや方法
要旨	まず、タイトルを【幼稚園児の聴覚と視覚を最大限活かす遊びや方法】に決めた。そしてこのタイトルに関連する要素に焦点を当てて調べ学習を開始した。そして“聴覚と視覚を最大限活かす事ができる“という大きな利点を発見し、その利点に着目して考えを深めた。その結果、当初の仮定であった“外遊びの方が子供にとって良い“は否定され、子供達が聴覚と視覚を活かす遊びに環境要因は関連しないとの結論に至った。

タイトル	丹波市の魅力
要旨	私たちは丹波市の魅力をテーマにして、その中でも祭りについて調べました。祭りの時にゴミが溢れるなどの問題があると思い、ゴミ問題の変遷や対策についてを祭りの主催者の方に聞きました。昔はゴミが散乱していましたが、今では買った場所に返す人や持ち帰る人が増えゴミ問題が解決されていると分かりました。お祭りに参加する人が快適に楽しめるように祭りに関わる全ての人がゴミの回収に協力していることが魅力だと思います。
タイトル	AR発展への道
要旨	ARは、より効率的・便利的な社会の実現を目指している。ARの基礎技術自体は、1968年頃からすでに生み出されてはいたがその後、ARはあまり知られていなく発展が遅れていたが、2007年以降の「ポケモンGO」などの一般消費者を魅了するようなサービスが次々に開発され、2010年代になるとハードウェアや開発環境の充実に伴い、更にAR技術が普及するようになった。このことからARはまだ進化を遂げるだろう。
タイトル	これからの世界の株はどうなるのか
要旨	これからの世界の株はどうなるのかというテーマで探究している。新型コロナウイルスの影響があつて、医療株が一番熱いんじゃないかと思って医療株について調べている。調べてみたところ新型コロナウイルスの影響だけでなく高齢化などの影響もあり医療の需要が上がっていることから、医療株も上がってきていることがわかった。食品株などと比較してポスターにまとめようと思っている。
タイトル	に移住してきた人から良い町だなどと思ってもらうためにはどのような工夫をしたら
要旨	私たちは、丹波市に移住してきた人に良い町だと思ってもらえる工夫を考える中でも外国人移住者というところに焦点を当てて探究を進めていった。ALTの先生にインタビューを行い現状を知った上で、私たちはイベントがあれば良い町だと思ってもらえると考えたので、全校生を対象に丹波市のイベントについてのアンケートを行ったり、ベトナム人の方がよく訪れるラ・カ・クアン・タンバさんに調査を行うなどして探究を進めていった。
タイトル	環境問題とレジ袋有料化の関係
要旨	私たちは環境問題とレジ袋有料化の関係について調べた 実際にビニール袋が有料化され、ビニール袋の使用量は有料化前と比べて約50%減少していることがわかった。その分二酸化炭素の排出量や使用量も減少できるのでレジ袋有料化の効果はあったとわかる。しかし、使用量がゼロになることは難しく二酸化炭素は排出される。
タイトル	障がい者とより共生していくにはどのような体制が必要か
要旨	私たちは、障がい者を受け入れていく体制づくりを実現させるには何をすべきかを考えるために、インターネットや業者への質問などを通して探究してきました。さまざまな企業の障がい者雇用率や、バリアフリーを取り入れる上でどのような条件が必要かを考え、問題点などを取り上げてまとめました。そこで私たちは、改善点や対策案を考えました。

タイトル	食品ロスを減らしたい
要旨	食品ロスを減らすために、ゴミはどこからでているのかを調べ、家庭での期限切れを防ぐと解決できるのではないかと考えました。家庭内のゴミに限らず事業所での廃棄物がどのくらいの量でているのかも調べ、食品ロス解決に向けて考えています。また、学校でアンケートをとり、生徒が食品ロスに取り組んでいるか、期限切れのものについてどう考えているか集計し、解決に向けて取り組みました。
タイトル	丹波市を活性化させて少子高齢化をおさえる方法
要旨	このテーマにした理由は、現在、丹波市の人口減少や過疎化などが長年問題になっており、改善するにはどうしたら良いのかと思ったからです。仮説は「丹波市から離れる理由は仕事の種類が少ないから」です。調べたことは、丹波市の人口増減率、人口増加の原因、丹波市でできる仕事の種類、丹波市の対策です。調べた結果、丹波市から離れる理由は、仕事の種類が少ないわけではないことがわかりました。
タイトル	拡張現実「AR」とはどんなものか
要旨	拡張現実「AR」とは、Augmented Reality の略であり、端末の画面を通して現実世界に仮想空間の情報を表示させる技術である。ゲームアプリ「ポケモンGO」に活用され、社会現象となった。スマホなどの端末や、インターネット回線が必要だというデメリットはあるが、商品の販売促進や仕事の作業の効率化といった効果がある。今後、市場の拡大によって、ARの普及率が上がっていくことが予想されている。
タイトル	なぜ日本のアニメは国境を超えて愛されるのか
要旨	自分たちは、日本のアニメの技術力と海外にはない固有のストーリーが、国境を超えて愛される理由だと考えて探究しました。インタビューをして日本と海外の違いや共通点について調べて、日本と海外のアニメの特徴やどのように進化してきたかによってジャンルやターゲットに差が生まれたことがわかった。そのことにより日本が国境を超えて愛されている理由が知れた。
タイトル	筋肉をつけるためには
要旨	私たちは、部活や趣味で効率の良い筋トレを望んでいることから、「筋肉をつけるためにはどんな食事が効果的なのだろうか」という問いを立てた。そこから高タンパク低脂質な食事、ささみやプロテインを摂取するという仮説を立てた。そして、肉の種類や摂取のタイミング、併用する食材を考慮した上で、タンパク質を摂取できる食事が好ましいという結果に至った。さらに具体的な検証やコスパ・手軽さから考えた食材、献立を提示した。
タイトル	丹波市の移住者はなぜ移住し、何を求めてやってきたか何を求めてやってきたか
要旨	私たちは丹波市にどうして移住者が来るのか気になったため、丹波の自然に魅力があり農業をしたい人が来るのではという仮説をもとに探究テーマを調べた。私たちはターンウェーブと農業の学校にインタビューを行い、その結果から子育てや転職などで移住、比較的都市圏に近い、関西で知名度が高い、などのさまざまな理由から丹波に移住してきたと考察した。

タイトル	農家人口は減っていいのか？
要旨	農家は兼業農家と専業農家の2種類に分かれている。人口減少に伴って農家人口も減っているが、丹波市では近年若年層の専業農家が増えてきている。増えてきている専業農家が活躍するためにも、生産性のない兼業農家はもっと減っても良い。さらに、日本の急速な人口減少や米の需要の低下によって農地は全て守らないといけないということはない。

タイトル	人口が減っても暮らしやすい町を作る
要旨	私たちは人口が減っても暮らしやすい町を作るというテーマで探究を進めてきました。まず丹波市の人口減少の現状について調べました。丹波市では2010年からの50年間で約25%の人口減少が見込まれています。児童数は過去25年間で約28%減少しています。このような結果から人口が減っても暖かいコミュニケーションを取る機会を設けることにより暮らしやすい町をつくることができると考えました。

タイトル	人口が減っていく中でどんな街づくりをするか
要旨	近年日本の人口減少を招く要因となっている少子高齢化。それに伴い、大都市から離れた都市では過疎化が問題となっています。そこで私たちの班は少子高齢化、過疎等の人口減少を引き起こす問題について考えようと思いました。人口を減らさないためには人口を増やす。では増やすためにはどんな街づくりをすれば人口が増えるのだろうかということを考えています。

3年生発表要旨（グローバル）

タイトル	教育心理学から不登校の支援を考えよう
要旨	以前から心理学に興味を持っていたので、心理学を関連づけて身近な社会課題を解決したいと考えました。その1つとして不登校について調べていくなかで、現在、全国的に不登校の生徒数が増加傾向にあるということを知り、心理学を関連づけた不登校支援に関して探究活動を行うことにしました。様々なフィールドワークを経て分かったことをもとに解決すべき課題を設定し、高校生の視点から考える新たな不登校支援の方法を丹波市の教育委員会に提案しました。

(3) 2 学年 (探究 II)

兵庫県立柏原高等学校
普通科
知の探究コース

陸上競技における補食の競技力的効果

氏名

1 探究背景

試合の直後・間...
エネルギーゼリーやおにぎりを食べる(補食)

練習後にも食べるべき??

補食とは...

3食で補えない栄養素を摂取すること

→ GI値(食後血糖値の上昇度)高い◎

【練習前】

- ①スタミナ維持
- ②集中力維持
- ③筋肉の分解防止
→炭水化物

【練習後】

- ①エネルギー補給
- ②疲労回復
- ③筋肉の修復、合成
→炭水化物+タンパク質

- ①血流が良い
→栄養吸収効率UP
- ②筋たんぱく質合成速度UP

練習後30分

“筋肉のゴールデンタイム”

2 実験

～練習後30分以内におにぎりを食べると
コントロールテストの結果はどう変化するか～

(1)調査項目

コントロールテスト

- ・40秒間走
- ・立五段跳
- ・30m走
- ・メディンボール投げ
- ・立幅跳
- ・パワークリーン

身体組成

- ・体重
- ・体脂肪率
- ・基礎代謝量
- ・筋肉量

①補食介入群

- A:短距離(400m)
B:跳躍(幅跳び、三段跳)

②非介入群

- C:投擲(やり投げ)

コントロールテスト計測日(計測前に身体測定)

- 1回目:11月6日
2回目:11月30日
3回目:12月24日
- ①に部活後補食を提供する

(2)おにぎり～補食としてのメリット～

トップ選手の栄養補給



リオデジャネイロ五輪
「パワーボール」として提供

GI値が高い



米のGI値84～88
パンなどより高い

用意が簡単

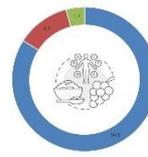


家庭にあるもので用意可能
継続しやすい◎

(3)提供する補食

Family Mart
手巻きおにぎり(紅しゃけ)

タンパク質、炭水化物を
バランスよく摂取できる

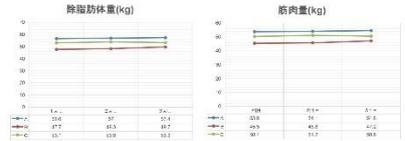
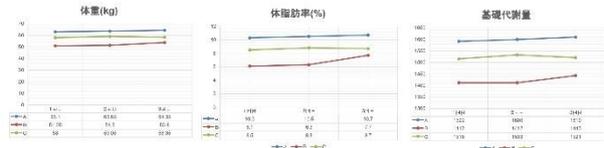


167円(税込180円)
熱量/172kcal

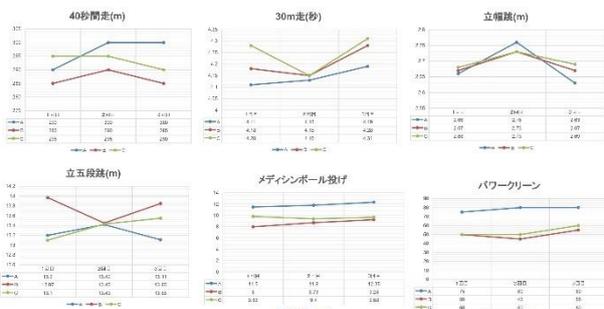
たんぱく質 (g)	脂質 (g)	炭水化物 (g)
4.90	1.70	34.60

3 計測結果

(1)身体組成



(2)コントロールテスト



4 考察

介入群では体重、基礎代謝量が増加!
筋肉量の増加率... 前半1ヶ月<後半1ヶ月
→補食を摂ることで筋肉量(除脂肪体重)が増える

コントロールテスト...
介入群、非介入群で有意な差なし!

課題点>>>
同一条件での実験ができなかった
→①天候、グラウンドの状態
②被験者の体調(故障など)



参考文献

- https://miyoshi-h.aichi-c.ed.jp/cms/wp-content/uploads/2021/08/gsports_report_H27_03.pdf
- <https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/ikusei/doc/k3-34.pdf>
- <https://aiicollab.ajinomoto.co.jp/news/2020/03/post-4.html>
- <https://www.jsna.org/cms/wp-content/uploads/2022/12/14-p050-058.pdf>

(4) 2学年 (丹BALⅡ)

兵庫県立柏原高等学校
普通科
丹BALⅡ

人口が減っても暮らしやすい町を作る

8班

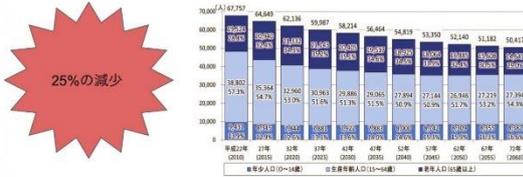
【このテーマにした動機】

中川ミミさんの話を聞いて人口減少が進む中でも暮らしやすい町をつくるのが大切だと考えたから

【人口減少の現状】

丹波市の人口

2010年 67,757人 → 2060年 50,417人
17,340人の減少



児童数

1955年 小学生 11,812人
中学生 5,392人
計17,204人 → 2020年 4,748人
12,456人減少



【探究を通して明らかにしたいこと】

暮らしやすい街をつくるにはどのような取り組みが必要か

【仮説】

人口が減っても暖かいコミュニケーションを取る機会をつくることによって暮らしやすい町をつくるができる

【暖かいコミュニケーションとは】

- ・日頃の挨拶
- ・地域の活動に参加
- ・旅行のお土産などを渡す
- ・料理を分け合う
- など



【コミュニケーションによるメリット】

- ・野菜やお土産等を分けてもらえる
- ・気軽に頼みごとをすることができる
- ・近隣情報が入ってくる
- ・緊急事態に素早く助けを求めることができる

【国民のコミュニケーションに対する意識】



親しく付き合う意識は減少してきていて、近所付き合いが苦手という人が多い。

【まとめ】

コミュニケーションを日頃から大切することによって、受けるメリットは多くある。しかし、年々コミュニケーションを大切にしている人は減ってきていて、近所付き合いが苦手な人も多い。よって、コミュニケーションを取ることで暮らしやすい町をつくるとはいえないと考える。

(5) 3 学年 (グローバル)

教育心理学から不登校の支援を考えよう

メンバー：大垣彩音 岡田莉奈 近藤玲奈

不登校の回復過程まとめ

- ↑ 第一段階 不登校開始期
 - ↓ 第二段階 悩み苦しむ時期
 - 🔋 第三段階 エネルギー補充期
 - 🔄 第四段階 エネルギー再活性期
 - 👤 第五段階 再活動希望期
 - 👤 第六段階 リハビリ期
 - 👤 第七段階 完全登校・社会復帰期
- } 対象

参照：おうち部HP

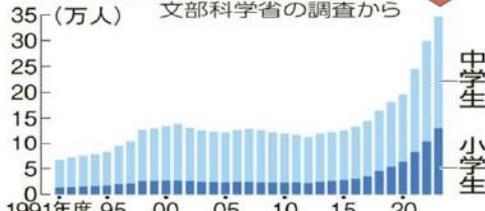
不登校とは？

何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間 30日以上欠席した者

※病気や経済的な理由による者を除いたもの

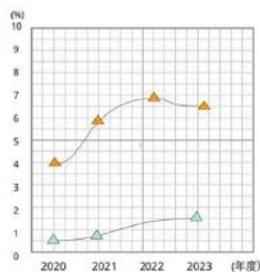
参照：文部科学省HP

不登校の小中学生の人数の推移



参照：朝日新聞DIGITAL「不登校の小中学生、全国で初の30万人超 コロナ禍以降で15万人増」

(山本知雄2024年10月31日)



丹波市の不登校児童生徒数

- ・中学生と小学生の両方に増加傾向があると考えられる
- ・中学生の不登校者が圧倒的に多い
- 中学生を対象に取り組む必要がある

参照：丹波新聞令和6年5月16日記載

フィールドワーク

目的：不登校に関する詳しい情報を得る

- ① スクールカウンセラー
- ② 丹波市教育委員会
- ③ レインボー教室（教育支援センター）



現状

人数 102人 ※R5 丹波市 中学生

- 種類
- ・休み始めた人
 - ・ずっと休んでいる人
 - ・別室登校



現状

理由

- ・社会の変化→スマートフォン・新型コロナウイルス
- ・家族の事情による転校
- ・勉強の遅れ
- ・漠然とした不安（将来に対してなど）
- ・人間関係

多種多様

支援

- ・先生による声掛け
- ・オンライン配信
- ・別室登校
- ・市が施設を設置（例：レインボー教室）
→学生サポーターなど



レインボー教室の活動内容

教育相談や発達検査や家庭訪問などの支援
(子供の相談を受ける&親の悩み相談)

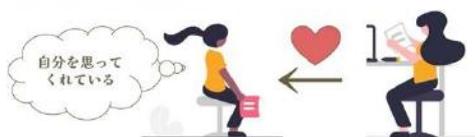
+

- ・自主学习
- ・スポーツ(卓球など)
- ・調理実習
- ・制作活動
- ・野菜栽培
- ・校外学習

誰かと協力することの大切さを学ぶ

心がけていること

ほっとできる居場所を作ること
→居場所≠単なる場所
居場所=人の接し方



弱み

支援施設の認知度が低い

→不登校にならないと認知し始めない



チラシは配られるが、意識して見ていない

発信状況

- ・ホームページ
- ・パンフレット（春休みに小・中学校に配布）
- ・ひきこもり等相談マップ

↓
保護者の人から申請



支援方法の提案

丹波市教育委員会へ…

目的：高校生の視点から考えた、新たな不登校支援の方法を提案する

考えを共有
+
アドバイスを
もらう

提案

①不登校支援施設を知ってもらおう！

→SNSとブログを利用した宣伝

②学校復帰を目指そう！

→トライやる・ウィークの利用



提案① 不登校支援施設を知ってもらおう！

→支援施設に行くことに対するマイナスなイメージを取り除く

SNSとブログを利用した宣伝

- ・Instagram・TikTokなどを利用して、支援施設の取り組み（雰囲気）や支援制度を発信する
- ・施設に通う子供たちにも投稿に参加してもらう

提案① 不登校支援施設を知ってもらおう！

メリット

- ・紙媒体やホームページよりも発信力がある
→Googleで検索した内容が他のSNSに反映される（ターゲティング広告）
→写真や動画は親しみやすく、リアルな情報
- ・若年層（10代~20代）の目に入りやすい
- ・子供達の楽しみになる

提案① 不登校支援施設を知ってもらおう！

検討事項

- ・自発的に見てもらわなければならない
- ・プライバシーの問題
→事前の許可が必須
NG：Instagram, TikTok
OK：YouTube
- ・炎上、誹謗中傷



補足：不登校を予防するために

友達との繋がりが大事

→友達がいる事で学校に行くきっかけ、支えになる

例えば…

- ・学校を休みがちになっている子の話を聞く
- ・普段から友達どうしてたわいのない話をする

補足：もし学校復帰できなくても…

・通信制高校

→オンラインでの授業がベース

進学タイプのコースを選ぶことも可能

受験も学力試験を実施していない場合が多い

参照：ID学園高等学校HP

補足：もし学校復帰できなくても…

・高等学校卒業認定試験

→高等学校を卒業できなかった方等の学習成果を適切に評価し、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があるかどうかを認定するための試験。合格者は大学・短大・専門学校の受験資格が与えられ、また、就職、資格試験等に活用することができる。

参照：文部科学省HP

不登校を克服する≠学校へ復帰する



以上で発表を終わります

— ありがとうございます♪ —

今後の計画



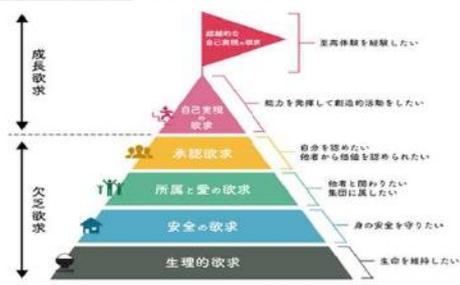
動機



自分たちが学校生活を送る中で身近な課題だと考えたから

マズローの欲求5段階説

参照：八木に平公式サイト記載



質問内容

- ・どんな取り組み（支援）をしているか
- ・不登校の子に関わる上で心がけていること
- ・施設の発信状況（発信範囲や発信の方法）
- ・現在状況（レインボー教室の利用人数等）



質問内容③ 弱み（自分たちの考えとそれに対する回答）

【自分たちの考え】

- ・もう少し不登校のひと他の人の関わりを増やすべき
- ・関わらないので対策が分からない

- ・他の人と関わりたくない人もいる
- ・サポートの教室で仲の良い友達がいると聞かれる
- ・小学生は放課後に遊ぶなど仲の良い子と関わる機会を作っている

フィールドワーク②

レインボー教室(教育支援センター)

場所：丹波市春日町黒井1519番地1

日程：7月24日

目的：活動内容などを聞く、施設内を見学する

提案② 学校復帰を目指そう！

トライやる・ウィークの利用

- ・支援施設に通う中学生たちがトライやる・ウィークの取り組みに参加する

- ※あくまで希望制
- ※通常のトライやる・ウィークの期間とは異なる期間で実施する

提案② 学校復帰を目指そう！

メリット

- ・施設外での活動を通して、様々な経験を積むことができる
- ・施設外での活動が学校への意欲向上につながる
- ・将来のことを考えるきっかけになる



提案② 学校復帰を目指そう！

検討事項

- ・トライやる・ウィーク先でトラブルが起きた場合、誰が責任を取るか
例) 体調不良, 問題行動など…
- ・トライやる・ウィークに参加してもらうことのハードルの高さ
→5日間連続で体験行くことへの抵抗感
→知らない人と関わることや働くことのプレッシャー

教育委員会

不登校の人のためになることは？

- ・保護者の人を巻き込む
- ・4月が転換期に

今後行っていきたいこと

- ・学校の授業の方法を変える
→受動的な授業+能動的な授業
- ・支援施設のスタッフを増やす

スクールカウンセラー

不登校のタイプ別の取り組み

◎子:○ 親:○

- ・別室登校
- ・朝や放課後に少しだけ登校
- ・本人ができることから少しずつ

◎子:× 親:○

- ・親と先生での話し合い
- ・ゆっくり見守る

◎子:× 親:×

- ・無理やり行かせると不信感に
- ・月一ぐらいで少しずつ連絡を取る

その他③ 普段から出来る対策 (教育委員会)

- ・友達の間で声をかける
- ・たわいのない話をする

→ちょっとしたことで関係作りになる
(会釈や目が合うだけ、プリントを渡すなどでも)
→友達との繋がりが支援として大事!
→普段の行動でも支えになる!

スクールカウンセラー

どういう方法で話を聞く？

本人が一番困っていることを聞き、対策などを考えていく
→困っていることが不登校の原因になっていることがある



その他① 心配 (教育委員会)

家から出てこない子

→家から出さない、ご飯を与えていないなどの虐待の可能性をなくすため、家庭訪問などでは親だけでも対応してもらって、関われるようにしている

その他② 心理学 (教育委員会)

心理学はすごく大事!!

- ・アタッチメントの教育心理学
- ・マズローの欲求階層
- ・大人の心理と子供の心理は違う

→研究結果などを支援に生かす 例) ふわふわしたものが良い など

比較①

日本と海外(アメリカ)



不登校の子供への対応の違い etc...

比較① (日本⇄アメリカ)

1. 不登校に対する制度の違い

日本

- ・不登校への寛容度が高い
- 不登校になることを許してしまう
- ⇒長期化&増加につながる

アメリカ

- ・アメリカでは義務教育での不登校は違法
- 親の「ネグレクト」(育児放棄)とみなされる

2. 進学率の違い

日本

- ・進学率：98%（2012年）
- 集団主義
- ⇒ 多様性に欠けている

アメリカ

- ・進学率：92.7%（2009年）
- 個人主義
- ⇒ 多様性が豊か

参考資料：文部科学省（教育指標の国際比較）

3. 不登校の子供に対する親の傾向の違い

日本

- ・子供を守ろうとする
- 子供の選択を狭めている

原因：コミュニケーションの不足

※ いじめを許さない意識が高い → 多様性の需要度の差

アメリカ

- ・子供の自立を重視する
- 子供の選択を尊重

参考資料：通信制高校メディア

柏原高生の夢実現後押し

丹波市 地域おこし隊員に寺戸さん

丹波市は11日、大阪府員 塚市出身の寺戸英二さん(34)に、地域おこし協力隊の委嘱書を交付した。市が推進する県立高校魅力化支援事業でコーディネーター役を担い、任期は最長3年。柏原高校の探究学習や生徒の関心に応じた地元人材とのマッチングなどに取り組み、子どもたちの夢の実現を後押しする。



林市長(左)から委嘱書を受け取った寺戸さん(丹波市役所で)

地方出身で幼い頃から親しむ丹波篠山市で「篠山神楽」に魅了され、専属の神楽団に三田市に移り任じた。2021年夏、指導者がいなくなる時、家庭教師を務め、教育やキャリアアτζサ

インなどに関心が高かったといひ、「自らの経験を生かし、丹波市の魅力アップに貢献したい」と地域おこし協力隊員に応募した。市役所であった交付式で、林時彦市長から委嘱書を受け取った寺戸さんは「勉強だけでなく、社会を広く学ぶ実践の場づくりに力を尽くしたい」と語った。

市は、県立高校の魅力化支援事業を2023年度から始めた。水上市西高校の「eスポーツ部」創部を後押しし、今年度は柏原高校を対象に約880万円の予算を計上している。寺戸さんは学校近くの「たんば黎明館」を活動拠点として6月から活動を本格化させるとい

読売新聞 令和6年4月12日

年間研究の成果発表

柏原高校 「探究」の考察伝える

柏原高校の生徒が1年間をかけて取り組んだ探究活動の成果を発表する「なぜ日本「地域課題から世界を考える日」が1月30日、同校で開かれた。それぞれが設けたテーマをもとに個人やグループで研究成果を披露。テーマの現状を把握し、仮説を立てたり、時には関連する人物に取材をしたり、文献に当たったりと、あらゆる方法で考察した結果を伝えた。



年間を通じ取り組んだ研究の成果を発表する生徒たち = 柏原町東奥で

「ま、市のプラごみのリサイクル率は68%で、その全てがプラスチックの原料として再利用される。分別テリアルサイクル」を「ごみ以外のごみや、汚れているごみ」を知ったごみプラごみが入っていた

ことが分かり、「きれいにするにはリサイクルできないごみがある」と。研究から得られたこととして、「プラごみが汚れていること、リサイクルできないごみ、リサイクルできないごみのプラごみが燃える用ごみ袋に入っている」ことをあげ、「これの解決が課題と発表した。

自由に研究した成果発表

丹波市

探究活動に力を入れている柏原高校（丹波市柏原町東奥）で、本年度の生徒による研究の発表会「地域課題から世界を考える日」が開かれた。各自が自由にテーマを選び、仮説を立てながら論文や書籍、識者への取材、実験を通じて考察。人口減少や農業振興といった丹波地域の課題の分析から国際問題の考察、「ホラー映画でダイエット」といったユニークな検証まで、多彩な報告が続々と披露された。（那谷享平）

柏原高校生400人、プレゼンなど挑戦

同校は近年、授業で探究・学探究科を新設。丹波と世界との連携を進める。活動を積極的に実践している。界両方への視点を持ち、多様な価値観を理解できる若者。2022年、文科省の「新時代に対応した高校改革推進事業」に指定され、者の育成を目指す。専門性の高い地元人材や有識者を24年には普通科内に地域科

交え、カリキュラム改善や

発表会では、1、2年生の全学年と3年生の一部の計約400人が、数人の班や個人で、ポスター掲示や舞台上でのプレゼンテーションなどに挑戦した。

生徒たちは24年春からテーマ選びに取りかかり、先行研究や統計の調査、学外の識者や行政担当者へのインタビューなどを経て、自分の仮説の妥当性を検討した。研究は文理を横断し、ローカルな課題と国際的な

課題を網羅。「人口が減っても暮らしやすいまち」はA「は教員になり得るか」はB「日本のアニメは世界で幸福につながるか」はC「無理に笑うことは幸福者の共生」なく、自由な学びの雰囲気がかがえる題材が並んだ。



体育館の舞台上で自分たちの探究について説明する生徒たち
＝いずれも柏原高校

多様な価値観を学び通じ育成

この日は授業の運営に協力する学者も見学し、生徒と意見交換。講師では、関西学院大学の高畑由起夫・名誉教授が「探究学習は大学や実社会での学びの基本でもある。大切なのはオリジナリティーとリアリティー、ストーリーです」と語り、適切なグラフの選択や問いの立て方について助言した。

神戸新聞 2025年2月1日 発行

「探究」結果を発表

柏原高2年 実験や文献研究

柏原高校「知の探究 先行研究を踏まえた文献研究」の2年生34人が、このほど、自身の関心がある分野を追究し、論理的思考力や課題解決能力などを身に付けることを目指す「探究」科目の発表会を丹波の森公園で開いた。ポスター発表のほか、8人がステージ発表し、自身が立てた「問い」について仮説に基づき実験を重ねた結果や、自説を述べた。

また、本田七彩さんは、「食卓の彩が及ぼす心理的影響、食事の満足度の影響、食事の満足度を上げるための食卓環境の提案」と題し、「緑色は食欲を減らさず色」として、食事制限が多い病院食に緑色トレイを使うのは、別の色に変更するのとを提案する。また、「障子競技における補食の競技力的効果」を発表した梅垣花菜さんは、介入群と非介入群をつくり、介入群の生徒には「ランチ」のおにぎりを一定期間食べさせてもらい、運動



発表後の質疑応答もあった「探究」発表会＝柏原町柏原で

能力が向上したかどうかや教師らが質問、発表者は測定結果を報告した。は分かる範囲で真摯に回答した。

丹波新聞 2025年3月15日 発行